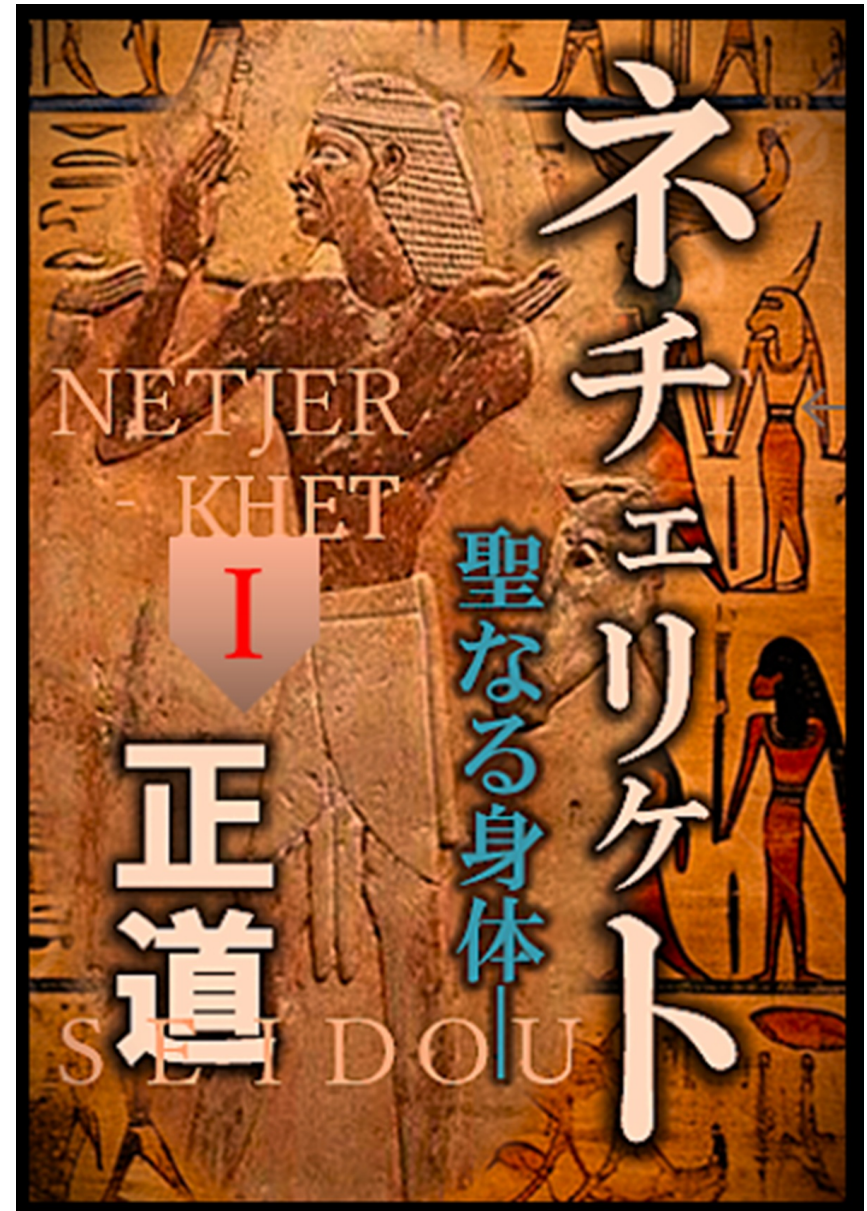




目次

ネチエリケト I	
「ヘルメティック・トリニティ」の刊行にあたって	3
全体の目次	6
序説 杖の刻印	
（1）美しいボディライン	8
（2）聖体図について	16
第1章 女性陰部と肛門（座標1）	
（1）生と死のセット	22
（2）大地と生死	25
（3）土の歴史	26
第2章 女的情念	
（1）主文と補記	30
（2）女性を知りたいという気持ち	31
（3）大地母神の代弁者	33
第3章 臍（座標5）	
（1）引き締まったウエスト	37
（2）外部からの強制	44
（3）ミロのヴィーナスの腹部	46
第4章 ユダヤ民族の鍛練	

(1)	二つ神の設定	50
(2)	座標5を強要された民族	51
(3)	鍛練を継いだ者たち	53
第5章 乳房（座標9）		
(1)	聖母の座	56
(2)	汚れと縁ぶかい出産	59
(3)	汚れを知らない母性	61

ネ
チ
エ
リ
ケ
ト

I

「ヘルメティック・トリニティ」の刊行にあたって

ヘルメス的三位一体

二〇二四年に「ディオニュソス・シリーズ」が完結した。これは「闇の神性」「二人の母」「世界の墓」から成る三作品のシリーズだった。

では次に何を書こうかと考えたとき、私はとくに悩むこともなく、この「ヘルメティック・トリニティ」の執筆を思い立った。

トリニティ（三位一体）というからには、本シリーズは必然的に、三つの作品によって構成されることになる。そして、ヘルメティックというからには、このシリーズでは、主軸として「ヘルメス的なもの」が描かれることになるだろう。

一般に「ヘルメティック」という言葉は、神秘的な、とか、錬金術的な、といったニュアンスで使われている。しかしながら本書では、もっと言葉の原義にさかのぼって、本当に文字どおりの「ヘルメス的なもの」を描きたいと思っている。

そして、私のいうヘルメス的なものとは、まず何よりも「ヘルメスの杖」のことに他ならない。そして、そこに三位一体という要素が加わると、本書の主要テーマは、次のような文章に行き着くことになるだろう。すなわち、

「ヘルメスの杖を、ある三つの角度から眺めたら、どのような景色が見えてくるか」という。

つまり、ヘルメスの杖は一つのものであるが、この場合、それを眺める視点（位相、ペルソナ）は三つあるということだ。

ここに確かな三一性が現れている。ゆえに本シリーズは「ヘルメティック・トリニティ」と呼ばれることになるのである。

三つの視点について

では、右で挙げた「三つの視点」の内実（主題）とはどのようなものだろう。

まず一つ目は「ヘルメスの杖のフォルムを、人体に当てはめると、どのような象徴的内容が見えてくるか」ということである。

二つ目は「ヘルメスの杖の各座標を、色相環と照らし合わせると、どのような寓意性が得られるか」ということ。

そして三つ目は「ヘルメスの杖の各座標のなかで現れる、男性性と女性性との、融合と離反のありさまは、どのような特性を見せるのか」ということである。

これら三つの視点から得られる視覚情報は、それぞれ『ネチェリケト』『色彩の寓意』『ヘルマプロディトス』という、三冊の書籍として結実することになる。

ちなみに、ネチェリケトはエジプト語で「神聖なる身体」を表し、ヘルマプロディトスは、ギリシア神話における「雌雄同体の神」のことを指している。

かくして『ネチェリケト』『色彩の寓意』『ヘルマプロディトス』という三つの書籍が、それぞれの角度から「ヘルメスの杖」の特質を、適正に照らし出したとしよう。

そのときにこそ「ヘルメティック・トリニティ」は、その三位一体的シリーズとしての役割を、十全に果たしたことになるのである。

章立ての順番

なお、ヘルメティック・トリニティでは、論述を基本的に「座標1、座標5、座標9、座標0、座標10」の順番で進めていくことになる。

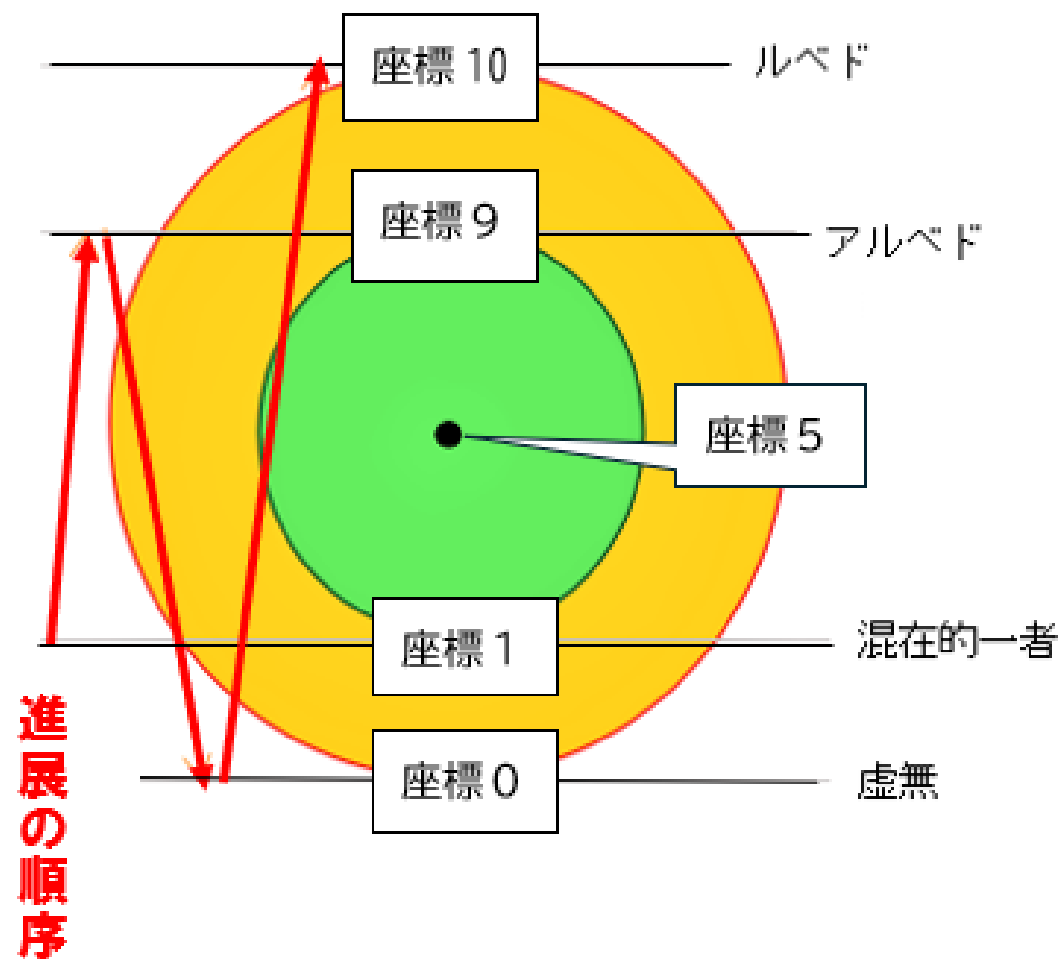
『色彩の寓意』のみ「座標1、座標2、座標5、座標8、座標9」の順となったが、これは色というものの性質上、仕方がない対処だった。ゲーテ曰く「色というものは曇りのなかにある」ものなので、発光（座標10）や暗闇（座標0）には言及できなかったのである。

いずれにしても、この順番は、第二、三福音書における「座標1、座標2、座標3、座標4、座標5、座標6、座標7、座標8、座標9、座標0、座標10」という論述順を簡略化したものである。

この順番は悟り、つまり「人間の神化」が、混在的一者（座標1）、教育の段階（座標2～4）、自我の確立（座標5）、アルベド侵入（座標6～8）、アルベド自体（座標9）、ニグレド（＝虚無、座標0）、ルベド（座標10）で進むことを示している。

これを図にすると、左のようになるだろう。

スクリーンショット 2025-05-08 20:23:33.png



結局ヘルメスの杖を適正に描出するとすれば、この順序を守ることより適切な方法論はないのである。
この点、読者の了解をいただきたいと思う。

全体の目次

ヘルメティック・トリニティの刊行にあたって

序説 杖の刻印

- 第1章 女性陰部と肛門（座標1）
- 第2章 女の情念
- 第3章 臍（座標5）
- 第4章 ユダヤ民族の鍛練
- 第5章 乳房（座標9）
- 第6章 さそりの火
- 第7章 男性性器（座標0）
- 第8章 二極化するヘルメスの杖
- 第9章 口（座標10）
- 第10章 アダムとアダマ

あとがきと付録

ネチェリケトという書名について
付録 『民間防衛』が教えること

序説
杖の刻印

（１）美しいボディライン

杖の形が刻まれた人体

人体には、ヘルメスの杖のフォルムが、まるで刺青のように——実際には、刺青以上に深々と——刻印されている。それが本書における、私の根本的な主張である。

おそらく今のところは、大部分の読者が、いま私が言ったことを「？」の表情で聞いていることだろう。さりながら、本書を読み終える頃には、同じ読者が、私の主張をすっかり、全面的に受け入れてくれているものと思う。本書で描かれることになる内容には、そのような希望的観測を正当化するに十分な、説得力があるはずだからである。

専門学校時代の授業

ところで、私の専門学校時代の授業で、講師がこのようなことを言っていた。

「コカ・コーラの瓶のかたちは、女性の体つきをモデルにしている」

そう言われてみれば、たしかにコーラの瓶には、胸のような盛り上がり、ウエストのようなくびれが見られる。加えてその下に「タイトなスタートを履いた女性」のような、膨らんだ下部ラインも見られる。

スクリーンショット 2025-04-17 19:20:21.png



したがって、講師が言っていることには、十分な信憑性があるように思われる。

ところが、あにはからんや、これは実は誤った俗説らしい。あの瓶の形は「暗闇のなかでも、それがコカ・コーラであることを触覚できるように」とデザインされたものらしいのだ。

もっとも、そうであったとしても「でも何故あんな形にしたのか？」という疑問は、横すべりに残っていくのではあるが……

それはさておき、我々は視点の向きを変えて、今度は「コカ」ならぬ、ヴァージン社のコーラのペットボトルを見てみよう。

そうしてみると、こちらでは講師の言葉を、そのままの形で裏づけてくれる事実が見つかる。

というのも、ヴァージン社の場合、そのボトルデザインを、アメリカでは有名な女優（パメラ・アンダーソン）のプロポーションに負っていると公表しているからである。

スクリーンショット 2025-04-17 19:17:07.png



つまり疑いようもなく、ヴァージン社のコーラは「ペットボトルの形を、女性の体つきに負っている」のである。

そして、結局のところ、ヴァージン社のそれも、コカ・コーラ社のそれも、その形状はよく似ている。そのように言うことが出来る。

換言すれば、そのフォルムのなかに、ごく簡単に、女性的な「バスト・ウエスト・ヒップ」を特定できるということである。

なぜこのデザインを

では、各コーラメーカーは、どうして、このようなデザインを採用したのだろうか。

上述したとおり、コカ・コーラ社の方には「闇のなかでも触覚で判別できるように」という基本コンセプトが存在したようだ。

しかし他面において、それが消費者の目に、見栄えよく映ること。つまり「美しいフォルムが消費者に好ましいと思われること」を狙ったのも確かなはずだ。それによって消費者の購買意欲が、少なからず高まるからである。

ヴァージン社のコーラに至っては、純粹に、それが主要な目的であろう。

美しいフォルム

突然ではあるが、いちど叙述を立ち止まり、ここで右のことを「逆に」考えてみよう。

どうして私たちは、コーラの瓶のようなフォルムを「美しい」とか「好ましい」と感じるのだろうか。おそらくコーラメーカーは、そのような現状があると想定した上で、あの特徴的なデザインを採用したと考えられるのであるが。

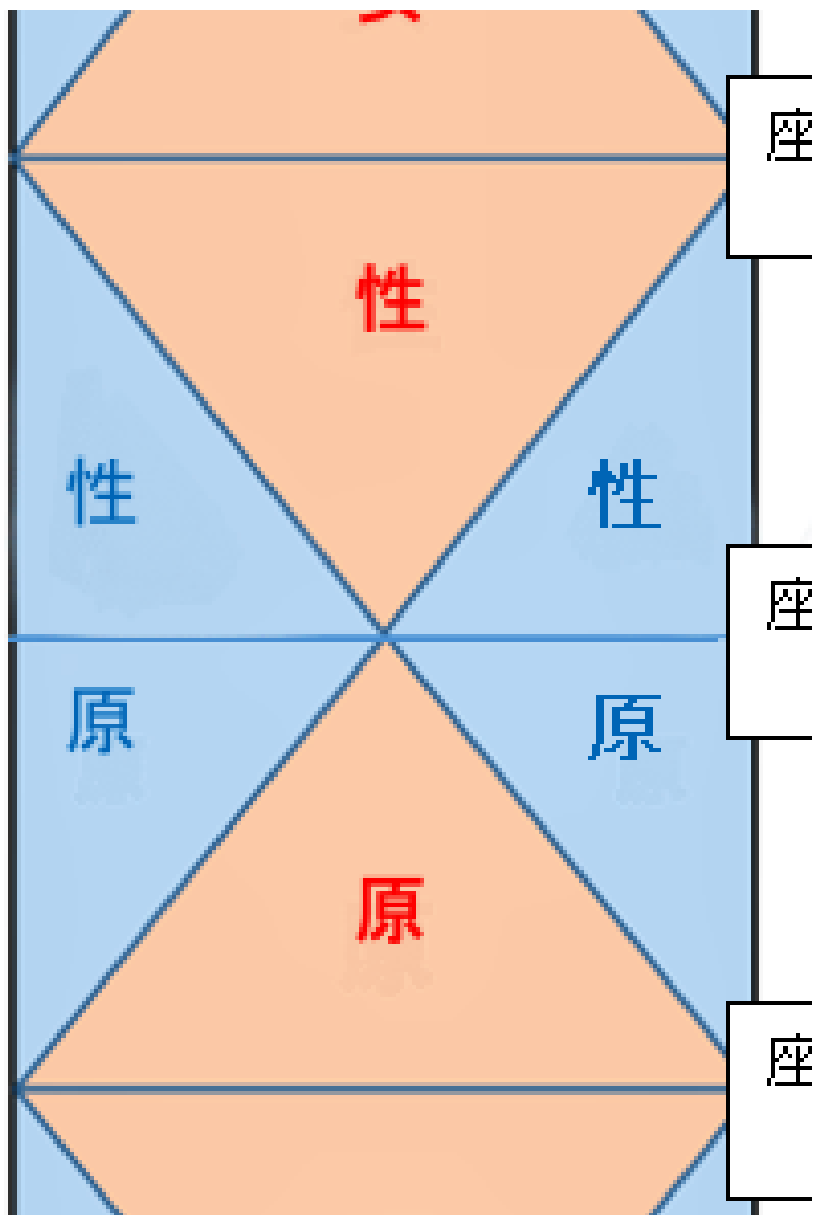
先に結論を言ってしまうと、それは、かの形状の内奥に、ヘルメスの杖という「神の体のフォルム」が秘められているからである。より端的に言えば、そこに神を見るから、私たちはこれを美しいと感じるのである。

女性の体とヘルメスの杖

それは当然、女性の体に関しても言えることである。

ヘルメスの杖は、座標9で膨らみ、座標5で引き絞られ、座標1で再び膨らむような形をしている。これは原理図で見ると、ことのほか分かりやすい。

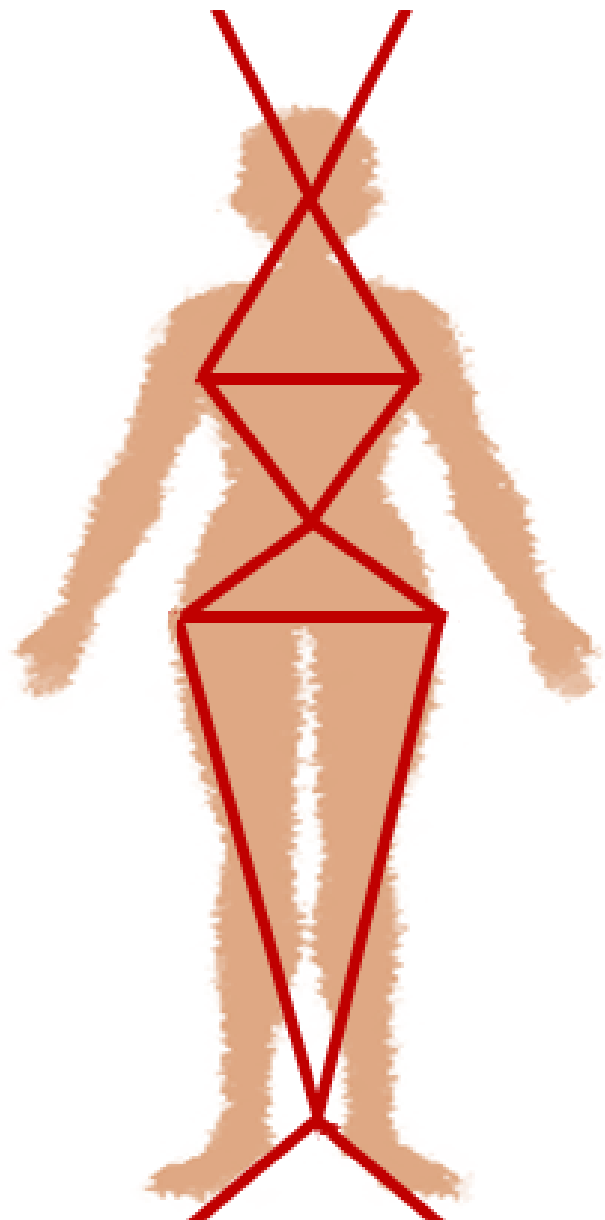
原理图 部分.png



そして私たちは、多勢の総意として「胸が大きく、腹部が引き締まり、臀部が豊かな女性の体」を見たとき、これを美しいと感じるのである。つまりは、原理図に則った凹凸を見たとき、これを至上の女性の肉体美として認識するのだ。

これを図示すると、だいたい次のようなものになる。

人体図とヘルメスの杖図像修正済み.png



コモンセンスとしての女性美

むろん個人差や国民性による差異はある。それは間違いない。あまりに凹凸を強調されると、見ていて疲れてしまうという人もあるだろうし、瘦身好み、逆に肥満ぎみが好ましいという方もあるだろう。私もモデル業界の裏話として「細いウエストを求めるあまりに、肋骨の最下部を、手術により切除してしまうことがある」という逸話を聞いたときには「何もそこまでしなくても」と思ったものである。ビスチェで無理やりウエストを引き絞ってからドレスを着せる手法にも、同様の感想を持ってしまう。

他方、何枚ものパットで胸を盛っている女性に対しては「そこまで胸の大きさに執念を燃やしている男ばかりじゃないだよ」と教えたくなる。私自身、大きかろうが小さかろうが気にならない質である。それでも疑問を挟む余地もないこととして、私たちが「胸が平板で、腹部が大きく膨れ、腰回りが貧弱な女性」には普遍的な美を感じないという現実はあるだろう。

いや、もしかしたら、それを好ましいと感じる人もあるかもしれない。けれどもそれは、一言でいって「マニアックな好み」だろう。とてもコモンセンス（普遍的な意見）としての美には結びつかない。そのように言いきるのは、右に挙げたような「中ぶくれ的、ないし、ずん胴的なフォルム」が、ヘルメスの杖の形状を、まるでなぞっていないからである。

やはり、美しいと讃えられる人体には、神の形状たる「ヘルメスの杖」が内蔵されているのだ。そして、他でもなく本書こそが、そのことを雄弁に立証する作品の嚆矢となるだろう。

(2) 聖体図について

多くの試み

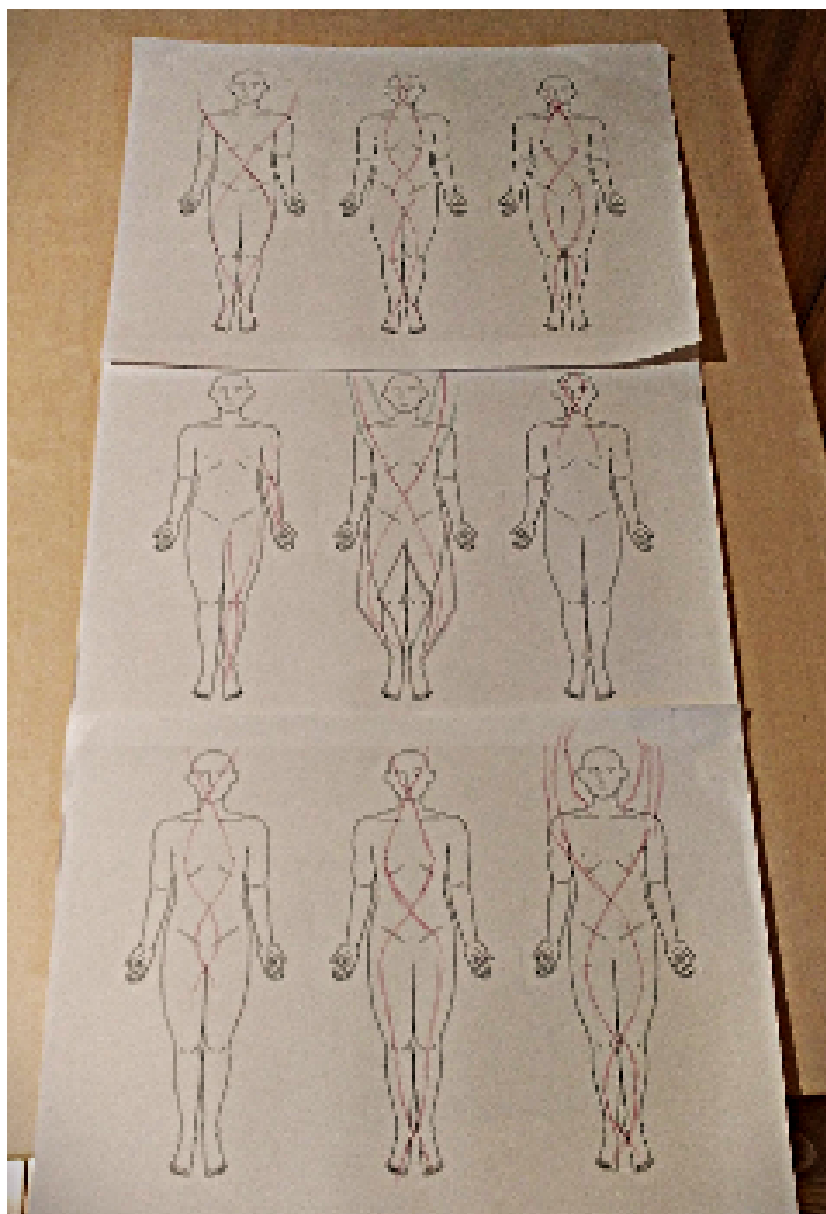
前節では、女性のボディラインのうちに、ヘルメスの杖の刻印を見出した。すなわち「バスト・ウエスト・ヒップ」のうちに。

しかしながら私は、それ以外にも、人間の体のうちに、複数の「ヘルメスの杖」の刻印を見つけようとしてきたのである。それこそ一つ二つと言わずに幾つでも。

そのような試みを「心のなかで」数年続けてきたが、今回『ネチェリケト』を執筆するための準備として、これを紙の上で実践してみることにした。私としては、目に見える形でもって、思索の成果を確かめたかったのである。

そうすると——ほとんど殴り描きのような図ではあるが——その点数は十個近くにもなった。

人体とヘルメスの杖.png

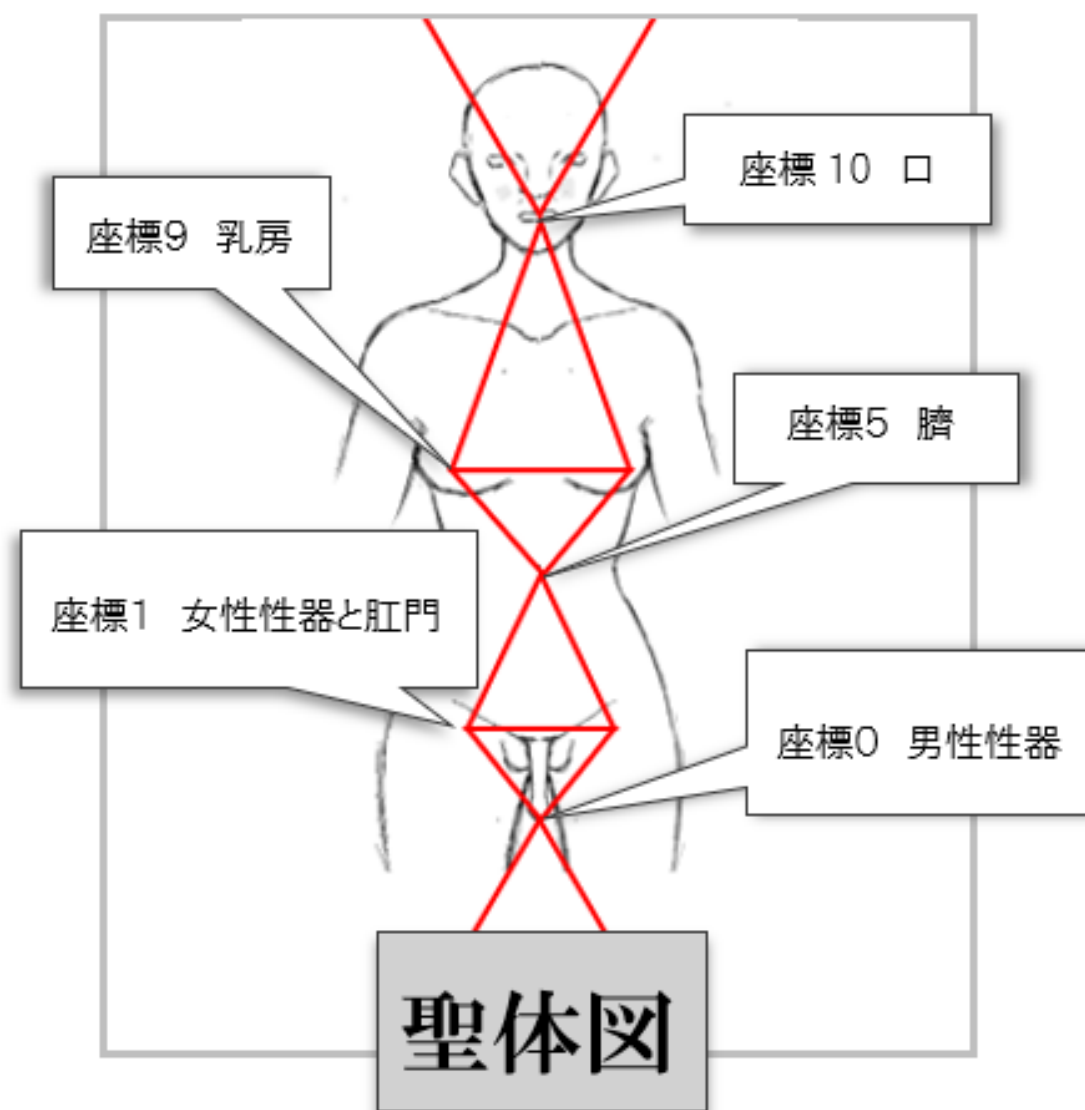


そうなるのも当然だ。なにせ「ヘルメスの杖」の形状が、もともと非情にシンプルなものだからである。よって、これを人体に当てはめようと思えば、その該当箇所は、本当にいくらかでも発見することが出来たのである。

聖体図とヘルマプロデイトス

しかし、本書で取りあげるに相応しいバージョンは、その数多の中にあって、ただ一つしかなかった。それが、私が「聖体図」と名づけた左の図である。

聖体図完成.png



この図のなかでは、一部で男性と女性の体が重なり合っており、その意味でヘルマプロディトスの像となっている。かかるヘルマプロディトスとは、両性具有の人間のことである。

そして「性差を弁証した『人間』は神性をもつ」というテーゼは、かのアルベドの真理の一端である。『戯曲ディオニュソス』でも、アポロンとアルテミスの合体神が、その真理を語っていたので、これを覚えていた読者もあるだろう。

ゆえに、かかるヘルマプロディトスの像をして、これを「聖なる身体」として扱うことには、間違いく神学的な正当性がある。

そして、そうであるならば、本書のタイトルが、聖なる身体を意味するエジプト語である『ネチェリケト』であることにも、十分な正当性があると言えるだろう。

当然の流れとして、本書では、この聖体図に沿って、その座標座標にふさわしい叙述を行うことになる。

これにより、他の二作品——『色彩の寓意』と『ヘルマプロディトス』——と付かず離れずしながら、より立体的な「ヘルメティック哲学」の構築が出来ればよいなと考えている。

それでは、第二福音書でも論述のスタート地点とした「座標1」の描写から、本編に入っていくことにしよう。

第1章 女性陰部と肛門（座標1）

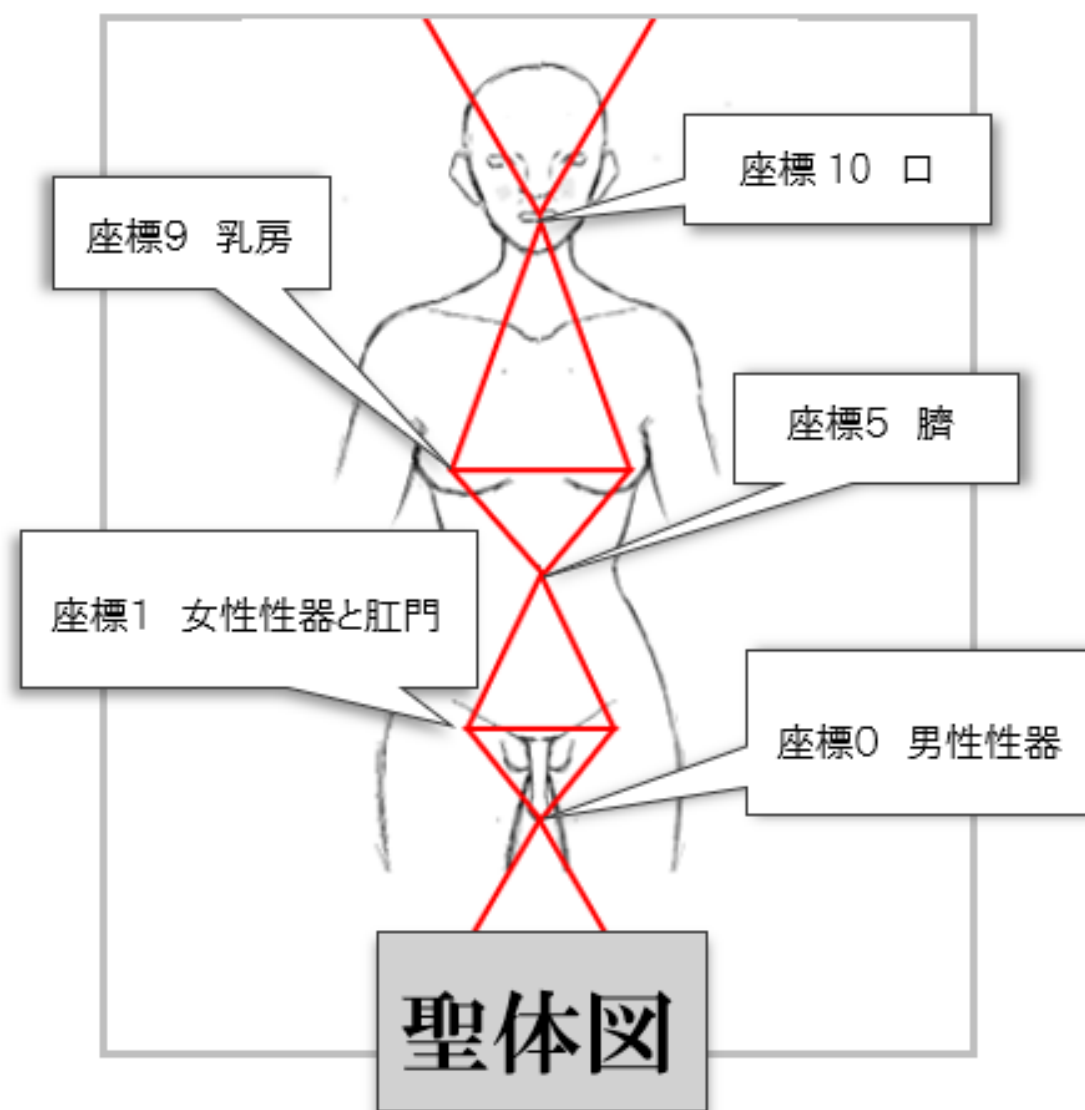
（1）生と死のセット

女性性器の崇高な役割

聖体図における座標1——この高さにあるものとしては、肛門が、男性女性とも共通している。

一方、性器（尿道）に関しては、女性のそれはこの高さに該当するが、男性の尿道口は、もっと下のほうに位置すると思われる。

聖体図完成.png



むろん陰茎の長さに個人差はあるだろう。なかには「私のはほとんど長さを持たないので、座標1でも構わない」と言う男性もあるかも知らない。

それでも本書では一応、男性の性器は、座標1よりも下部にあたる「座標0」として取り扱いたいと思う。それが平均的な現実であろうと考えるからである。読者には、その点ご了承いただきたい。

そうすると、座標1に残るのは、女性性器と肛門ということになる。そして、彼女らの性器は、ときに「産道」としての役割を担うことになる。

つまり女性の膣からは、赤ちゃんが出てくることになるのである。おしなべて哺乳類は、ここを現世における「生存の始発の場所」とする。

ちなみに鳥類や爬虫類は、肛門（総排泄孔）から、主に卵を生み出すことになる。ただし蛇のうちの何種類か（マムシなど）は、卵ではなく小さな蛇を産む。

もちろん人間の女性の場合も、膣口から小さな人間を産むことになる。そして胎児は、このときを境にして、新生児へと更新される。これが人間にとっての「誕生の瞬間」と言えよう。

言うまでもないが、男性性器の尿道口には、このような崇高な瞬間に立ちあう資格は与えられていない。

生み呑み込むもの

生命を誕生させる機能をもつ女性は、しばしば生命の司（つかさ）のような扱いを受けることがある。たしか小林製菓に「命の母」という名前の菓があったと思うが、もしもこの菓の名前が「命の父」だったとしたら、その違和感は、拭いようもなかっただろう。やはり生命は、女性とセット化されてこそ、その結びつきを自然に感じられるのである。

とはいえ、そうして女性とセット化された「生」は、さらに重ねて反射的に「死」という言葉を連想させる。そう連想せぬよう努力される方もあるかもしれないが、生まれなければ死にもしないのは確かだ。とすれば、やはり生と死は不分離のセットであると言わざるを得ない。そこには、離婚など考えたこともないほど仲睦まじい夫婦、といった趣さえある。

こうなると「生命の司である女性は、同時に、死の司でもある」と言わざるを得なくなるだろう。

ユングなどは、このことを率直に表明して、グレートマザー元型（大母＝偉大な母性）の本性は「生み呑み込むもの」であるとしている。呑み込んだ先にあるのは、間違いなく腹中の暗闇と「死」であろう。

しかし日本では——正確には神道では——「死」が最上級に穢れた忌み言葉であるため、ユングのよ

うに率直な表現は見られない。

むしろ、化粧したように美化された言葉として「母の膝の上」などと言われる。それが「人間の最終的な憩いの場」であるとしてだ。しかし、この膝の上からは、間違いなく、かすかに死の匂いが漂ってくるのである。

（2）大地と生死

母なる大地

もっと普遍的なところでは、女性を大地に擬するという伝統がある。これは西洋にも東洋にも等しくある。そして、この表現のもとでは、「生と死」のセット化は、それがたとえ日本であっても、より率直に遂行されることになる。

まず生であるが、大地が「植物を生みだす苗床」であることは誰でも知っている。そして、その植物を摂取してこそ、自身の生命を保てる動物たちがいることも、みな知っている。そうである以上は、大地が「生命全体の基盤」であることは間違いないだろう。

しかしながら、その大地は他面、死んだ動物や、枯れた植物が還帰するところでもある。その様子を眺めて、率直に「土に還る」という言い方がなされることもある。

事実、我々の命が尽きたときには、物質を生命体として統括していた糸は、プツリと切れてしまう。そうして、統括を離れた組織（物質）は、まるで溶けるようにして土へと吸い込まれていく。

もっとも、茶毘に付される形（火葬）だと、これは若干かりづらい話になってしまう。けれども土葬の場合、その土に溶け、吸い込まれていくプロセスは、まさに「大地に呑み込まれていく」という様相をとることになる。

なお私の祖母は、一度土葬されたものを数年後に火葬した。土葬したのは「焼かれるのは熱いから嫌だ」という祖母の遺言に従ったからである。

大地とは死骸と排泄物

ところで、この大地とは何だろう。さしあたって、土の集積であることは間違いない。そして、その下層部の材料となっているのは、岩石や火山灰といった、地球の火成活動の賜物であることも周知の事実である。

さりながら私たちは、岩石や赤土をして、これを生命と結びついた「母なる大地」であるとは見なさない。私たちが「母なる大地」と呼びならわすのは、あくまでも、あの黒々とした表層部分を伴った状態の「土の集積」なのである。

では、その黒い土の材料となっているのは何であるか。それは結局のところ、動植物の死骸と排泄物である。排泄物とは、言うまでもなく大便や小便のことだ。そして、それは当然、座標1にあたる、性器や肛門から出てくるものである。

この死骸や排泄物を、小さな虫やミミズ、さらに微生物や真菌類（カビやキノコ）が分解する。そう

して細かく均されたものが「黒い土」である。

よって、土の材料自体は、たいそう忌まわしい物ということになる。排泄物は別名「汚物」であるのだし、日本における死や死骸は「死穢」と呼ばれる「ケガレ」に他ならないのだからである。

ところが私たちは、不思議と「黒い土」を汚らしいものだとは思わない。むしろ土いじりには、強い愛着を持つ人すら多いことだろう。つまり園芸の愛好者たちのことであるが、これは一体どういう訳であるのだろうか。

むろん「死骸」や「汚物」が、分解されることによって、かつての形態を失っていることが第一の理由であることは間違いない。しかし、それに次ぐ理由は、やはり土というものから、新たな生命の気配、あるいは「生命の匂い」が感じられるからではないだろうか。

（3）土の歴史

土の始まり

日本の小笠原諸島に「西ノ島」という火山島がある。そこに陸地らしい陸地が生じたのは、一九七三年の噴火によってであり、二〇一三年、二〇一九年の噴火で、さらに陸地の規模が拡大された。

そして、その拡大されたばかりの陸地部分には、当然の事として「土」がなかった。そこあるのは、ある程度冷え固まった溶岩でしかなかったのである。

ところが、最新の調査で、ようやくここで土が発見された。ほんとうに些少な土であるが、とにかく土の概念と一致するものが見つかったのである。

具体的にそれが何かといえば「鳥の死骸」である。おそらく島の上空を飛んでいたのが、火山ガスにあてられて墜落したものだだろう。

そして、その鳥には小さな虫が付着していた。加えて微生物なども一緒に付いていたはずだ。そのため死骸の発見時には、すでにこれらが鳥の死肉を分解し始めていた。つまり鳥の死骸は、このときすでに「土へと還る過程」に入っていたのである。

こうして見てみれば「死」が土の始まりであることは、誰の目にも明らかである。さらに、そこに新たな鳥の糞が落ちたとしたら——かつその糞に植物の種でも混じっていたなら——まもなく、かの「土」からは草木が芽吹くことになるだろう。

そしていつかは、この行程が、島全体を包み込むかもしれない。

そうなった時の景色は、疑いようもなく、熱い溶岩の禍々しさよりも、冷えた溶岩の寒々しさよりも、はるかに私たちにとって好ましいものとなる。

いや、緑色の景色などと贅沢を言わなくとも、無機質な溶岩よりは、生死を抱えた黒土に、私たちは、

より強い親しみを感じる。それは土も私たちも、等しく「生と死」で出来ているからではないだろうか。

糞尿の働き

少しばかり鳥の糞の話をしたが、読者も、ホームセンターに行きさえすれば、畑で使う肥料として「鶏糞」が売られているのを見ることが出来るだろう。これも鳥の糞（尿と一緒にになっている）である。

そこからも分かるとおり、糞尿は、土の栄養分として大変有益な働きをする物質なのである。

この事情は人間においても、さして変わらない。

周知のとおり、女性の性器は排尿のための装置でもあり、これと同じ高さには、肛門という排便のための装置がある。そして、この尿と便は、死骸と並んで、まさに土の材料の代表格となっているのだ。

繰り返しすが、これらの排泄物は、土の成分を豊かにする働きが強い。より生命を励ます物質であるとも言えはいいだろうか。

それだから人の糞尿もまた、実際に肥料として使われていた。肥溜めで発酵させたあと、柄杓で畑に撒かれたのである。寄生虫の問題などから、現代ではまず使われることがないが、昔の日本では、農家にとっての必需品ですらあった。

真菌類の働き

右で「糞尿を肥溜めで発酵」と言ったが、実際、単に死骸や排泄物を放置しても、それがストレートに土になってくれる訳ではない。

そこに小動物や微生物、真菌類（カビやキノコ）の働きが加わって、初めて土が生まれる。この働きを発酵とか腐敗と言うのであり、これにより有機物は、無機物のレベルまで、細々と分解されることになる。その際、とくに真菌類の働きには目覚ましいものがある。

ところが真菌類は、地球史においては、植物などより、ずっと後に現れた種族なのである。そのため、かつて地球には「植物はあっても、それを分解する真菌類はなかった」という不思議な時代があった。

要するに「枯れ木が積み重なったまま、それが土へ還らなかった時期」というものが、長らく存在したのである。

もしこの当時の情景を実見できたとするならば、果たして私たちは、それを大地と呼んだだろうか。母なる大地と呼べただろうか。

おそらくは無理だろう。というのも、それがあまりにも安らぎのない景色であるからだ。枯れた木材の山では、まるで不法投棄の現場のようではないか。

とはいえ、この私たちにとって違和感しか持てない情景が、後世に大きな恵みをもたらすことになった。なぜというに、分解されなかった植物が、それ自体の圧力によって変化し、ついに石炭や石油と呼ばれるものになったからだ。

逆に言えば、真菌類が登場するようになってからは、植物由来の石炭や石油は生産されなくなった。それらが生じる前に、枯れ木たちが「土」へと変化するようになったからである。もちろん、この場合の土は「黒い土」であったことだろう。

こうして大地は、私たちの知る、あの母性的で穏やかな姿へと、次第に自己を変貌させていったのである。

では、ここまですべてを第1章としたい。

第2章 女の情念

（1）主文と補記

制作上のずれ

本書『ネチエリケト』と『ヘルマプロディトス』は、主文と補記をサンドイッチ状に積み重ねることで構成されている。主文という語句に説明はいらないと思うが、補記とは「補って記すこと。また、その記したものである」。

本書においても『ヘルマプロディトス』においても、主文となるのは奇数章、補記となるのは偶数章である。したがって、偶数章である本章は「補記」ということになる。

このような構成になった大本の理由は、もともと全五章で構成しようと考えていた『色彩の寓意』が、ふたを開けたら——それでも途中段階であったが——全九章に膨らんでしまったことにある。しかも、全体的な文章の分量も、草稿と比べると倍近くにも膨らんでしまった。

これには『色彩の寓意』の草稿が数年前に出来上がっていたこと。ならびに、当時の「草稿を書いていた私」に、作品の規模を小さく抑えようという気持ちが微塵もなかった、という事情が反映している。

逆に、今回「ヘルメティック・トリニティ」に取り掛かろうとした時には、私はなるべく作品の規模を、ミニマムに抑えようと考えていた。このシリーズの後に配信しようと思っている文書の構想が、すでに脳内で出来上がっていたからである。

その作品に早く取り掛かるためには、その目前に陣取るシリーズ（Ⅱヘルメティック・トリニティ）を、なるべく小規模に抑えておかなければならない。

かくして、ここに制作上の齟齬が生じたわけだ。やはり古い革袋に新しいブドウ酒を注ぐと、何かしらの不都合は起こってしまうらしい。

自由な文章として

聖書の言葉はさておき、そもそもトリニティ（三位一体）と言っているのに、三つの作品の規模に大きなバラつきがあるのは、私としては面白くない。気にならない方もいるだろうが、書き手が気になってしまっは、もう仕方がない。

そこで急遽書き起こしたのが、偶数章にあたる「補記」である。

こちらは、主文とのつながりを保ちながらも、かなり自由な内容を書かせていただいた。少なくとも肩をいからせて書いた「補記」はない。そのためか、私としては、主文を書いているよりも、補記を書いているときのほうが数等楽しかった。

具体的にいうと、主文を固めたあと「さて何が出てくるかな」と、補記の内容をゼロから考える——と

いうよりは、インスピレーションが降りてくるのを待つ——時間が、何とも言えず愉快だったのである。ことによると読者のほうも、主文を読むより、補記を読むほうが楽しいかもしれない。

無論それはそれで構わないが、私としては、主文と補記のつながりには、かなり気を遣ったつもりである。したがって「補記」のほうだけが、変に作品から浮き上がってしまうような事態にはならないだろう。そしてそれは、当然、本章にも当てはまるはずだ。くどくどしい前置きはこれぐらいにして、次の節から「補記」の本文に入ることになろう。

（２）女性を知りたいという気持ち

未知の生物

今さら何だと言われそうだが、私は男である。生まれてこのかた、ずっと男である。まあ、内心のヘルマプロディトス化が進んでいるので、一般男性に比べたら、女性的な心理要素も、そうとうに開発されていると思う。

けれども肉体的には、純正な男として生まれてきているので、肉体的な女性にはなれないし、女性の肉体的にもなう心理素についても、理解しきることとは出来ない。

これが肉体的ヘルマプロディトス（いわゆる、ふたなり）として生まれていたら、話はシンプルだったかもしれない。それならば、男女両方の肉体的性を知悉できたろうからだ。

だが、実際にそうであったなら、私はシーナや陽子とも関わっていなかったはずである。それはイコール、私の人生が、アルベドやルベドの悟りとも、無縁であったということになる。それでは、この時代に私が生まれてきたことの意義自体が失われてしまう。

いずれにせよ、結局のところで女性というものは——なканずく肉体的な女性は——私にとって「理解しきることが出来ない対象」ということになる。

哲学者としての呪い

が、そうであるからこそ、かえって私は「女性について深く知りたい」という気持ちを抑えられなくなってしまった。

これは哲学者としての呪いかもしれない。つかみきれない真理を、それだからこそ追究して止まないのが、哲学者というものだからだ。

それならば、自分が絶対知り得ないこと（肉体的女性）に夢中になることは、もはや本能（＝呪い）

のカテゴリに属するだろう。

そして私の「女性について知りたい」という思いは、二十代の始めごろに、ことさら強く膨らんでいった。何といっても当時は、女性恐怖症の状態から脱しようとしていた時期であり、それゆえ女性というのが、私にとり、非常に美しく思えた時期でもあったからだ。

女性について知りたい——その願望を叶えるために、私が意図的に行ったこともある。それは当時執筆していた小説である『アトラス』の語り口調を「です・ます」調にしたことだ。

すでに『アトラス』の全編を公開してあるので、読者には、これを直接目にすることも出来るだろう。そして、この「です・ます」調は、まずもって小説の文章が「丁寧であること」を狙ったものではなかった。そうではなく、あれは自分が「女性になったつもりで」ストーリーを語ったものである。

要するにあれは、ですます調というよりは「女性口調」なのだ。

そのおかげというか、そこまで徹底的に女性であろうとした対価というか——『アトラス』の執筆を終了した私には、アルベドの悟りが与えられた。これまでも何度か語っているが、アルベドは女性原理の権化と言ってもよい悟りである。

それでも分からない部分

その後も私は、アルベドからルベドへと、自分の悟りを更新していった。これによって私は、精神的なヘルマプロディトス（両性具有）としては、かなり高度なところまで到達したものと自負している。とはいえ、肉体的な女性に関しては、今もって分からないことが多い。それゆえ「これを知りたい」という気持ちも一向に収まる気配がない。

であるからこそ私は、三度あった妻の出産にも、その三度すべてに付き添った。そうなったのは、妻から「怖いから傍にいてほしい」と言われたのが、直接の理由ではあった。

だが、そのような要請がなかったとしても、私は積極的に分娩室に入っただろう。

なぜならそこには「肉体としての女性にとって、もっとも本質的な場面」あるいは「肉体としての女性でなければ、絶対に現せない重大な場面」があるからだ。私にはどうあっても、それを間近で見られる「千載一遇のチャンス」を手放すことは出来なかった。

事実、かの分娩室には、そこでしか得られない宝が、山のようにあった。

ここで具体的に、それが何であるかについて語る気はない。が、あの場面を実際に見ていなかったなら、今のように「女性について自然に語る正道」は存在しなかっただろう。それだけは今でも確言できるし、この点で、妻に感謝しきれものではない。

またそれ以外でも、長い家庭生活のなかで、自分の母親の「女の老いていく姿」や、娘たちの「子供が女性になっていく過程」を見る機会に恵まれた。これらにも学ぶことは多かった。それらは何らかの形で、確かに私の哲学の血肉となっていくことだろう。

楠見千鶴子氏の著書

そして最近になって、さらに生々しい「肉体的な女の真実」を教えてくれるものに出会った。それはもはや「女の情念」と言ってもいいものだった。

これを私に教えてくれたのは、作家の楠見千鶴子氏である。『戯曲ディオニュソス』のプロットづくりの際に参照させていただいた『酒の神ディオニュソス』の作者だ。

もちろん氏と直接の面識はないのだが、少し前に、彼女の本を意図的に購入したのである。

その本のタイトルは『ギリシア神話の女たち』。ただし新刊では全然なく、あまつさえ『酒の神ディオニュソス』よりも前の著作だ。初版の発行は一九八四年ということである。

この本を購入しようと思ったきっかけは『酒の神ディオニュソス』のあとがきに、

「前著『ギリシア神話の女たち』を書いていたとき、罪深い七人の女たちそれぞれの生き様の究極のところに、この神「ディオニュソス」の大きい影を認めざるをえなかった」

と書いてあったのに、今さらながら強い興味を持ったからだった。私は、ディオニュソスに関わることならば、何でも知りたいのである。なおかつ、そこに何か、未知なる宝が眠っているような予感がした。

(3) 大地母神の代弁者

ペーネロペイアの真実

いざこの『ギリシア神話の女たち』を捲ってみると、まず、そこから立ち上る、ムツとした女性ならではの情感に、軽い目まいを覚えるほどだった。

たとえば楠見氏は、貞淑な妻の典型として尊ばれてきた女性の「裏の顔」を、自己の心情を通して、容赦なしに暴き出してみせる。

それも、よりによって「ペーネロペイア」の裏の顔である。多くの男たちに囲まれながらも、二十年ものあいだ、自身の貞操を守りきったというペーネロペイア。夫オデュッセウスの帰還を、二十年ものあいだ、じっと待ち続けたという、貞女ペーネロペイアの裏の顔を、である。楠見氏はいう。

——女心を誘う蜜の言葉、広げられた力強い両腕、利権がらみの即物的な愛情で、男たちはまるで一匹の女王蜂に群がる働き蜂よろしく、なりふりかまわずペーネロペイアの歓心を買おうとした。

王妃は狼狽し、嫌悪しつつも、いつの間にかこの異常な生活が手放せないものになっていく。ことに非常に若くして結婚し、平凡な妻の座しか知らなかったこの王妃には。彼女は徐々に慣れていった。

かつてない生活だった。百二十九人のそれぞれ異なった男たちが、孤独なペーネロペイアの夜を放恣

にした

もしペーネロペイアという女性の感性が鋭く、イマジネーションを自在に操ることができるなら、男よりもずっとたやすく幻影によって満たされることも犯されることも可能な女の特性によって、王妃の輪姦幻想は一段と激しく燃えたったことだろう――

『ギリシア神話の女たち』より抜粋

本当にここには、男のあずかり知らない、真実の「女の情念」が描かれているように思われた。私はこの文章を読んだとき、これまで触れようにも触れられなかった、女性心理の一端に直接触ったような気がした。

そして、そのしびれるような感触に、一種不思議な満足感を覚えたのだった。

大地母神に憑かれながら

それにしても、さすがはディオニュソスに惹かれ、その果てに『酒の神ディオニュソス』のような作品をもにした女性作家である。右の文章からは、性的オルギアの熱気が、滾々と溢れ出ているではないか。

そして、これは特に重要なことであるが、性的オルギアを主催するのは、いわゆる「大地母神」たちなのである。

私の『戯曲ディオニュソス』で登場した大地母神はキュベレーであるが、アフロディーテやアシュタロテ、デメテルなども、有名な大地母神である。

そして彼女ら大地母神たちは、読んで字のごとく、まさしく、母なる大地の神格化に他ならない。

この大地母神に、すっかり憑りつかれたのが楠見氏であった。彼女は、その憑依された特異な眼差しでもって「母なる大地」の本質を、ことごとく暴いてゆく。しかも一流の物書きとしての洗練された言葉によって。

そして、彼女の的確な叙述は、第1章で私が語ったことの裏づけとしても、最高の助勢をしてくれる。どうか読者にも、彼女の文章を、実際に読み味わってほしい。

『ギリシア神話の女たち』から

――果てしなく掘り起こされたヴォイオティアの野は、切り立つ山々の影に隈取られながら、古代もいまも変らぬ黒々とした春の土を息づかせていた。

肥沃ゆえに最古代から争いの絶え間がなかったその土は、滅入るような暗さに包まれ、人の血や生や死の匂いを立ち昇らせながら、秘かな微笑を洩らしているような不気味さがあった。

重苦しさ、鬱陶しさに耐えかね、私は眼を逸らそうとしたが、どこを向いても土しかなかった。土が、空のように続いた。

見れば見るほど、妖しく黒々とした大地は女そのものであった。

この大地のような底知れぬ暗さと魔力を漂わせ、あらゆるものを呑み尽くすように思えるのであった。

淫らかな微笑を湛えた肥沃な土。清浄なものも穢れきったものも躊躇うことなく呑み尽くし、生きとし生けるものの死と再生をほしいままに支配する。

土は、雪ほどにも動きません。降ることもとけることもなく、変容を見せることはないのです。ましてや海のように、流動して文物や人を運ぶこともない。

時をはじめ、あらゆるものがそのまわりで動くにもかかわらず、土は不動で、その上に流れ落ちるものの、故意に注がれるものだけを受けて生きている――

いかたであろう。よもや、これほど明瞭な「母なる大地」の描写とてあるまい。私にはここに、まさに女性作家だからこそ書き表せた「女の真実」があるように思われるのだ。

では、ここまでで座標1の補記を了としたい。

第3章 臍（座標5）

（1）引き締まったウエスト

上下左右の中央

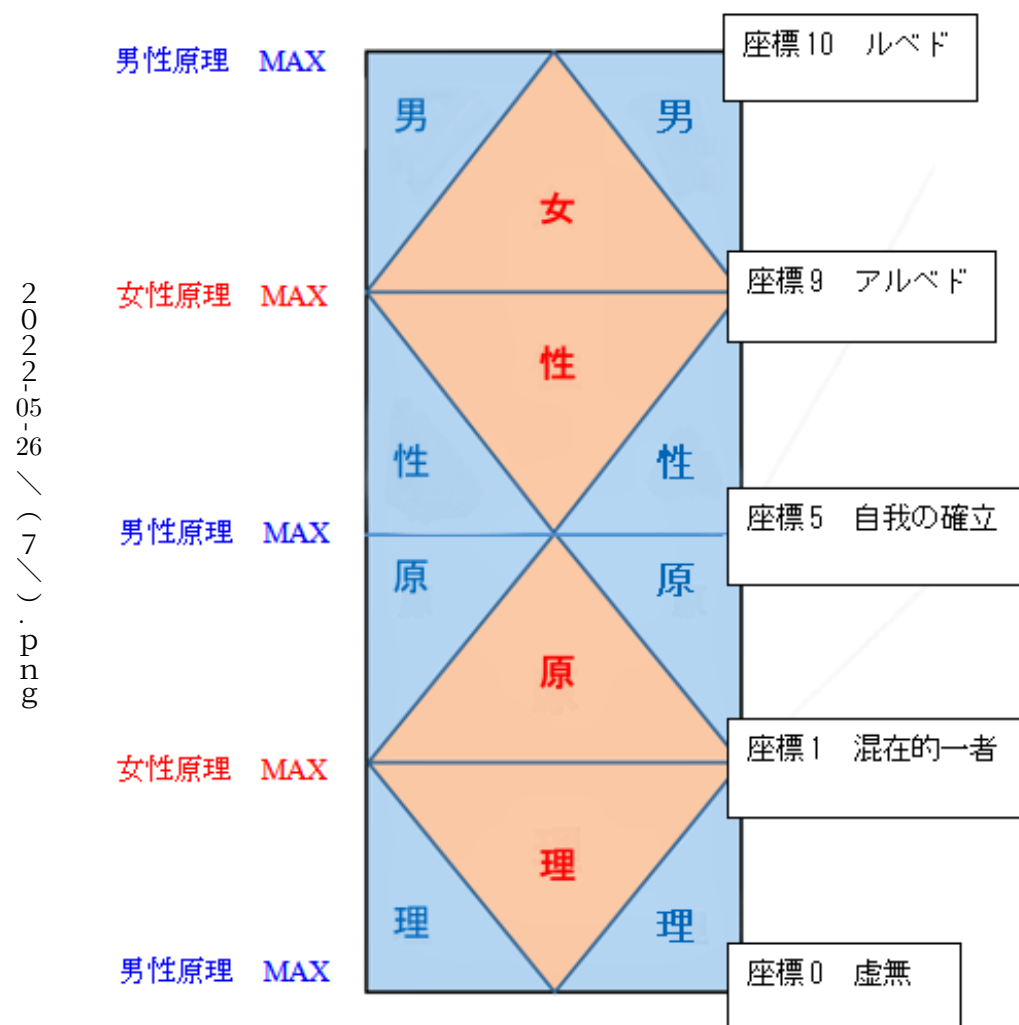
私は自分の錬金術哲学について語るとき、座標5を論述の基点にすることが多い。

これは私が、哲学的な話の出発点を、たいてい座標5に定めているということである。第五福音書で「アポロ的なもの」「ディオニュソス的なもの」を説明したときなど、まさにそうだった。

どうして、そうしているのか。それは、上方に向かう座標について語るにも、下方に向かう座標について語るにも、その論述を、ニュートラルに始めることが出来るからである。もっと平たく言えば、

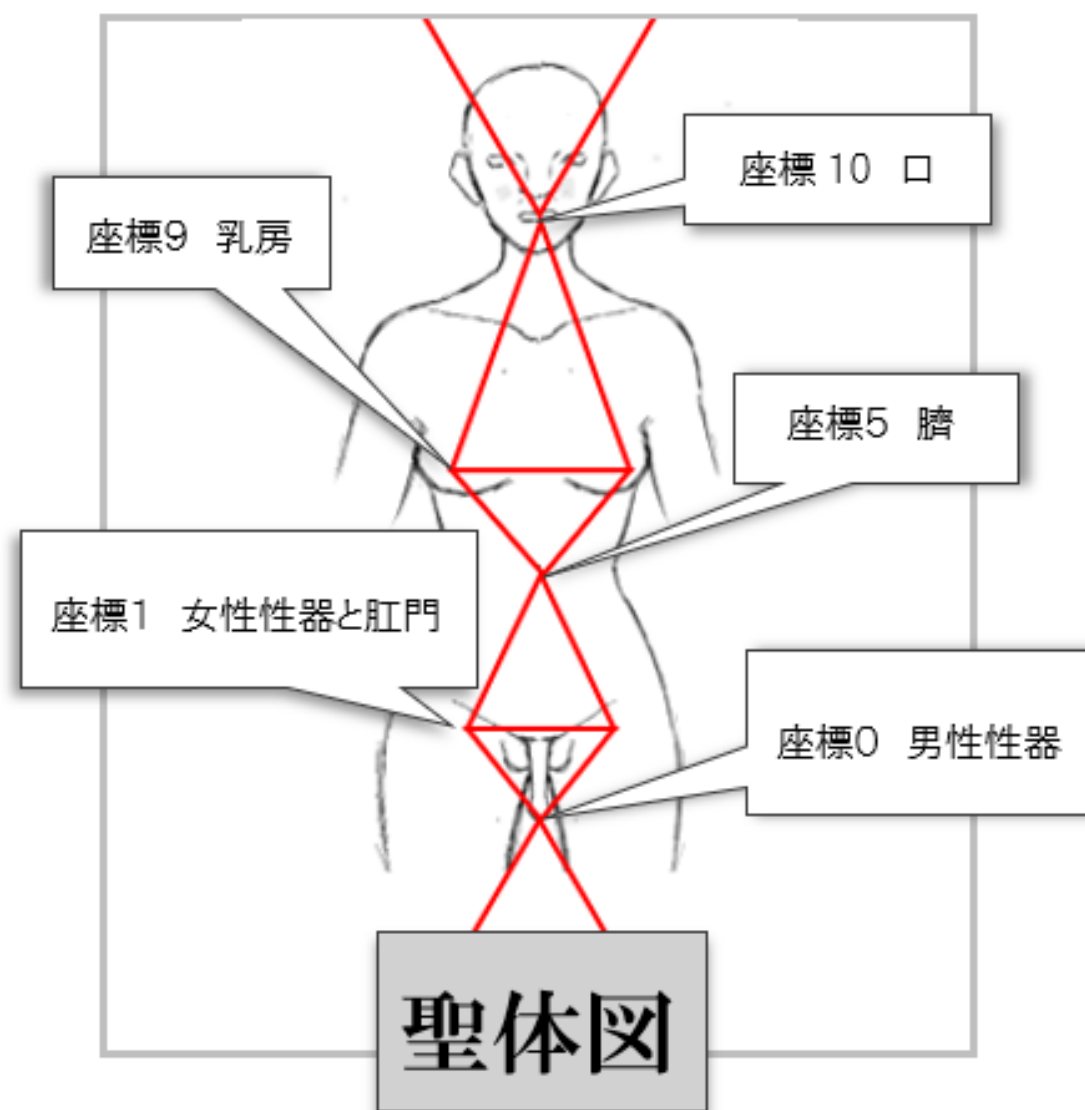
「中央に基点を置けば、上に行くにも下に行くにも丁度いいし、便利だ」ということだ。

原理図



そして、ネチエリケト（聖なる身体）のなかで、そのような座標5とパラレルな関係にある部位が「臍」であることは明らかだ。上下のみならず、左右に関しても、人体の中央部を占めているのが、この「臍」だからである。聖体図を見ても、それは明白であろう。

聖体図完成.png



そのため座標5について語る本章では、この臍を中心としたウエスト周りについて考察したいと思っている。

細いか引き締まっているか

世には、まことに羨ましいことに「食べても太らない」という人がいる。もっと精確に言うところから食べても腹部が出ばらない体質」という人がいるのである。そういう人は、本当に、いくら何を食べても、一向に体型の変化が起こらない。

私などは、残念ながら、食べれば食べただけ太ってしまう質だ。だから「食べても太らない」などという話は、私にとっては、ほとんどお伽噺のようにすら聞こえる。

とはいえ、一見して感じることもだが、食べても太らない人のウエストというのは、物体としてのフォルムが細いだけで、そこに特別「ウエストが引き締まっている」というニュアンスは感じられない。

そして、あえてその美しさを問うならば、私たちはやはり「ただ細いだけのウエスト」には、あまり大きな美的感銘を受けることがない。

そうしたもののよりは、筋肉によって引き締められた腹部のほうが、はるかに「美しいもの」として、これに深い感銘を受けることになるのである。

いや、たしかに「食べても太らない」は人類の大部分、とりわけ女性たちの憧れではあるだろう。

しかしながら、右で語ったことが事実ならばだ。そのときにより高い価値を持つのは、むしろ「食べたら太る人間が、それでも何とか太らないように鍛錬を重ねた結果」であるわけだ。

これはもしかしたら、世間一般に対する、かなり厳しめの意見表明なのかもしれない。ただ細いだけで評価されているウエストも、世間には、相当数あるだろうからだ。

しかしその反面、自身の努力を継続できる人たちに対しては、私の言葉は力強い励ましとなり、かつ一種の福音ともなるのではないだろうか。

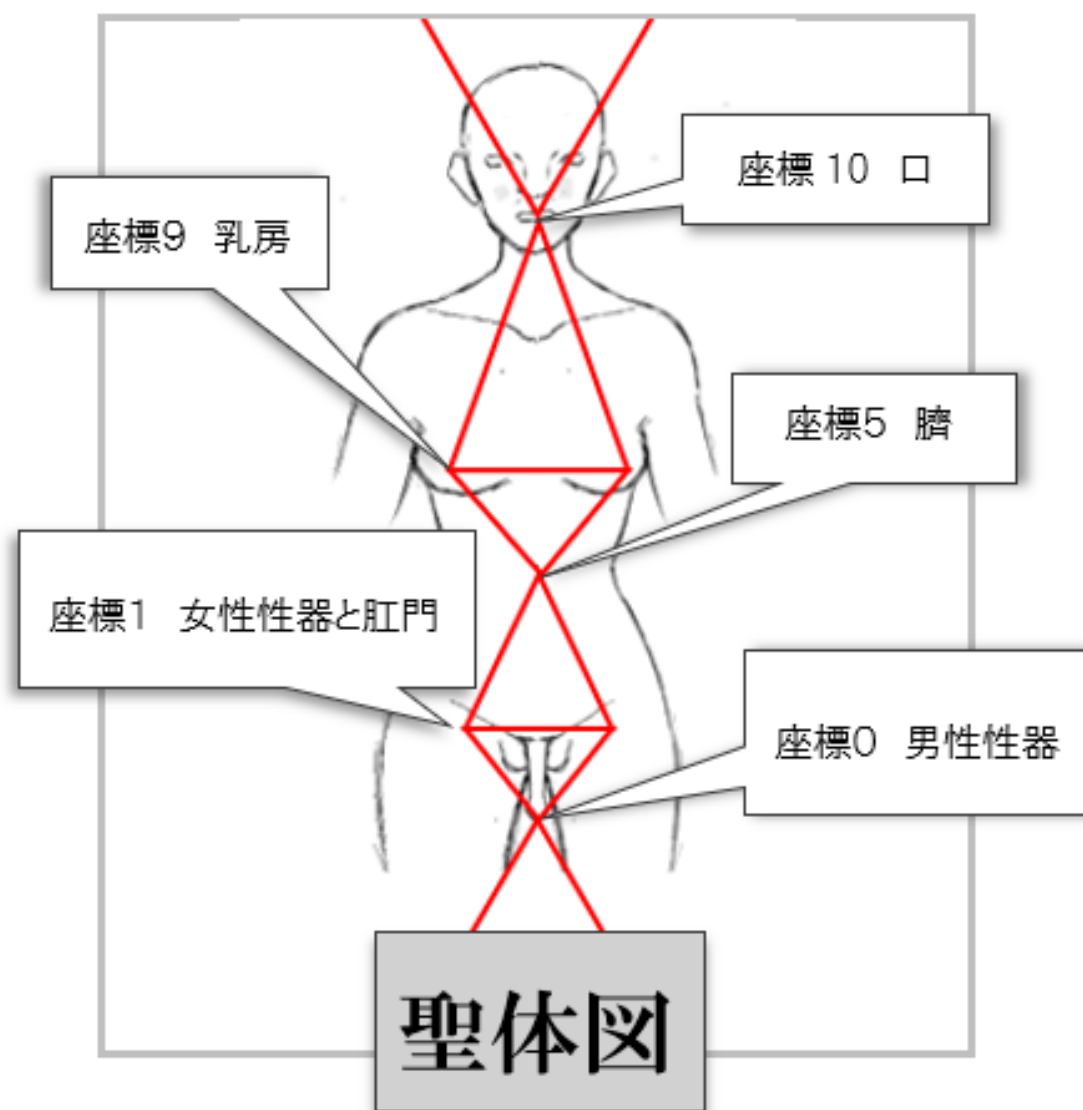
二本の線の結末点

ただ細いウエストよりは、引き締まったウエストのほうが、その価値が高い、というのが前項の結論だった。

その結論を踏まえて、改めて一から考えてみよう。

ヘルメスの杖の形状からすれば、臍（座標5）は、二つの線の結末点にあたる。そして一個の点であるならば、それは最も面積が狭まっている箇所でもあるはずだ。

聖体図完成.png



このような特徴をなぞるのであれば、ウエストというものは、要するに細ければ細いほど美しいということになるだろう。

もちろん、人体としての自然さ、生物体としての自然さ、というものにも一定の価値がある。それゆえ度を越してまで細まったウエストには「不自然さ」というマイナス要因が付加されることになるだろう。それゆえ私たちが求めるべきは、あくまでも自然の範囲内における「細いウエスト」ということになる。そして、そんなウエストの「肉体としての構造的特徴」は、何よりも「骨に包摂されていない」ということだろう。

たとえば胸まわりなどは、すっぽりと胸骨や肋骨で包まれている。よって肥満に関して「ある程度は、その骨によって膨張を抑制されている」というふうに言えそうだ。

であるのに、ほとんど不公平なまでに、腹部はいかなる骨によっても抑制されていない。ただ後部にある背骨によって支えられているだけである。

そう、背骨は間違いなく後部にある。そのため前面にある腹部は、何の遮るものもなしに、己をいくらでも膨張させることができる。皮だって柔軟に、いくらだって伸びてくれる。まったく何と厄介な自在性であることか。

膨張を抑制するもの

そして、そのような「骨という抑制材を持たない腹部」にあっては、自己の膨張を抑制するものといえ、もはや「食事制限」と「運動による腹筋の増強」しかない。ことに三五歳あたりを過ぎれば、この言葉は否応なしに真実味を増すだろう。

たしかに薬品やサプリメント、脂肪吸引や手術によっても、ウエストの体積を減らすことは出来る。それは私も事実として認めよう。

その中でも、とりわけ面白いものとして、胸から腹部にかけての脂肪を「筋肉の形に整形する」という手術を挙げることが出来る。これぞ人工痩身の極めつけだ。

この舶来の術式は「ミケランジェロ」と呼ばれており、高須クリニックの院長は、自身の肉体に、実際にこの術式を施している。そのため高須氏の体は、一見すると、まさしくミケランジェロが描いた『最後の審判』の登場人物のように筋肉質になっている。

もっとも、その筋肉の材料となっているのは脂肪なので、この「筋肉」に触れば、ショックを受けるほどにも柔らかい。百万円を下らない施術の代償は、あくまでも「形」であって、決して質の変化ではないのである。

いずれにしても、金に飽かせて、人工的に痩身を手に入れることは、どう考えても座標5のスタイルではない。人体を創造した神は、そのようなことを望んではない。かかる選択には「確立した自我」の気配が、まったく感じられないからである。

となればやはり、神が求める肉体美のためには、「食事制限」と「運動による腹筋の増強」を自主的に捧げるほかないのではないだろうか。

（2）外部からの強制

痩身ビジネス

もっとも、この「食事制限」と「運動による腹筋の増強」を、主体の自主性とは別の「痩身ビジネス」として成立させた企業もある。すなわち巷間に溢れるフィットネス・クラブがそれに当たっている。

なおフィットネスとは、健康の維持や増進のために行う運動のことをいう。そのための商業施設が「フィットネス・クラブ」であるわけだ。

そして、そうしたフィットネス・クラブの中にあって、私たちに近年もっとも強い印象を与えたのが「ライザップ」だった。別に、ここで非難や営業妨害をするつもりはないので、実名を出させていただく。さて、この企業のCMにおいては、実に晴れ晴れとした調子で「結果にコミットするライザップ」というコピーが謳われた。

けれども私は、あのCMを見て首を捻ったのである。彼らの言う「結果」とは、いったい何を指している言葉なのだろう、と。

たしかに私たちは、ライザップの体形管理（食事制限と運動による筋肉の増強）によって、見事な痩身を手に入れた顧客を目にしている。これがライザップの言う「結果」なのだろうと納得もする。

さりながら、その「結果」が出たと同時に、その顧客の人生が終わるわけではない。その翌日から、当然のこととして、彼の人生は一日一日と続いていくはずなのだ。それが厳然たる事実というものである。だが、たとえ事実がそうであったとしても、その「後発分の人生」に対しては、ライザップは何のコミットもしないだろう。なにせ彼は、もう顧客ではなくなってしまうているのだから。

つまり「結果」が出たあとならば、ライザップ側としては「元顧客が再び太ったところで、自分たちは、何の関わりもない」ということになるわけだ。

しかも、そのような態度は、商業論的に言えば、しごく正当なことなのである。

だってそうではないか。たしかにライザップは「痩身」結果」にはコミットしたのだから。彼らは、お金をもらった分の責任は、ちゃんと果たしたのだから。

継続する強い意志

もちろん、かかる不安定な「結果」の後であっても、もう一度、あるいは何度でも、ライザップの顧客になることは可能である。安定した収益になるのだから、ライザップ側だって、きっとこれを喜ぶだろう。

しかし、それを実際に行う人間は、おそらく、ごく少数であるに違いない。

それというのも、何度も瘦身プログラムに身を投じられるとしたら、そこには間違いなく「継続する強い意志」が働いているはずだからである。

そして、顧客に元来「継続する強い意志」が具わっていたならばだ。その場合彼は、他者（ライザップ）に、自己の肉体管理を依頼するような事は、初めからしなかったに違いない。彼は迷うことなく「自己管理のもとに、瘦身にいたるスケジュールを消化する」という選択肢を採っていたことだろう。

逆に、自分の体事情すら「他者」に管理依頼するような人間には、自我の中枢機能とも言うべき自律性（＝継続する強い意志）をモノにすることは出来ない。冷たい言い方かもしれないが、それが事実なのだから仕方あるまい。

よって、ライザップの顧客が「結果」のあと最終的に手に入れられるのは、結局は「早晩のあきらめ」と「再びたるんだ肉体」だけなのである。

終わりのない鍛練

こうなると、究極的には「自分の瘦身を維持できるのは、ある程度、自我を確立できている人間だけ」ということになる。繰り返すが、体形を維持するためには、どうあっても「継続する強い意志」が必要だからである。

そして、それと同じぐらい重要な別の事実もある。それは、体形維持、体形管理に「終わりの日」は来ないということだ。

まことにそうである。とくに中年以降の体形管理というものは、ひとまず「結果」に至ったと思った瞬間に、まったく前と同じ内容の「次の課題」が課されるようなものののだ。

しかも、これが延々とずっと繰り返されるのである。まるで、あの甲斐なき、シシュポスの岩運びのように。なにしろ、引き締まった体を保持できるタイムリミットは通常二、三日であり、長くとも、せいぜい数日に過ぎないのだから。

ウエストを中心とした筋肉の鍛練は、したがって毎日のように行わなければならない。それこそ死ぬまでか、あるいは「老い」という不可避的な衰退を突き付けられ、もはや努力のすべてを諦めるしかない日が来るまでは。

何にしても、結論としては、自分の肉体管理に責任感を持ち、自律的な鍛練を続けられる者だけに「引き締まったウエスト」は恵まれることになる。

換言すれば「私が行う」という強い意志を、自己習慣化させられた者だけが、この「臍の高さの座標（座標5＝自我の確立）」の課題をクリアすることが出来るのである。

（3）ミロのヴィーナスの腹部

絶世の美女のウエスト事情

さて、これまでの話を聞いて「それは男の場合だけだろう」と思った読者がいたかもしれない。シックスパックの腹筋は、男性の腹部を飾るからこそ見栄えがするものであるう、と。

しかし、なかなかどうして、そうでもないことを、ある絶世の美女が証明する。

その女性とはヴィーナス。すなわちギリシア・ローマ神話における「美の女神」である。女神と呼ばれるぐらいだから、彼女が絶世の美女であることは間違いあるまい。

ただし、本物の女神など、現世を生きている人間が、実際に目にするなど出来ようはずもない。そのため、ここに取り上げるのは、女神のレプリカたる、有名なヴィーナス像ということになる。

そこで登場するのが、美術史上にあって、有名な上にも有名な「ミロのヴィーナス」だ。紀元前二世紀ごろ、ギリシアで創られたと考えられており、現在はフランスのルーブル美術館で展示されている。

ミロのヴィーナス.png



見てのとおりトルソー（腕がない、体幹だけの像）であるが、それだけに私たちの視線は、胸や腹部や腰回りといった、まさに「ヘルメスの杖」的な形状に集中することになる。むしろ視界に主要なものしか入ってこなくて都合がいい。

男性腹筋の移植

何にせよ、女神である彼女の体は、女性美そのものを表しているはずだ。

ところが、この「ミロのヴィーナス」の腹部は、美術史家たちにより「男性の腹部を模したもの」だと言われているのである。換言すれば、女性の肉体のうちに、腹部だけ、男性のものを移植させているということだ。

いや、なにも美術史家などを引き合いに出さなくともよからう。我々にだって、そのぐらいのことは、普通を感じとれる。なにしろ彼女の腹部には、明らかに「シックスパックス的な線」が見えるのだから。たとえ線が見えなくとも、彼女のウエスト周りは、たしかに引き締まった「男性を感じさせるもの」となっている。そして、このようなウエストだからこそ、彼女は「究極の女性美」を具現化しているように見える。

となれば驚くべきことに、ここでの結論は「女神という『女性美の究極』を描こうとすれば、そのさいには、彼女のウエストに、男性的な腹筋を取り入れなければならない」ということになるのだ。これは結構アイロニカルな話なのではないだろうか。

ちなみに『ヘルマプロディトス』においては、私は「座標5にあっては、女性も精神的に、かなりの度合いで男性化する」と書いた。ここでは、それと同じことが肉体的な側面で現れていると言えるだろう。では、これで座標5の主文を了としよう。

第4章

ユダヤ民族の鍛練

(1) 二つ神の設定

第一福音書の振り返り

私は以前に、臍の高さ（座標5）を、旧約聖書における「ヤハウェ神による、ユダヤ民族の鍛練」に譬えたことがある。それは福音書シリーズの「第一福音書」で、グノーシス主義に触れたときのことである。

そこでは新約聖書の「イエスによる許し」が胸の高さ（座標9）に準えられており、それが臍の高さ（座標5）と対比されている形となっている。

ただし「その胸と臍は、飽くまでも『ひとつの神の肢体』のうちに包摂されている。別に『胸の神』と『臍の神』という二つ神が存在している訳ではない」というのが、そのくだりの真の主題ではあった。それほど長くないので、いっそ該当箇所をそっくり、ここで再録しておこう。

二つの部位

——新約、旧約をとおして、神は一つである。

譬えて言うなら、私は「イエスの父」と「旧約のヤハウェ」は、一なる神の肢体の、いわば「胸にあたる部分」と「臍にあたる部分」を指し示しているに過ぎない、と考えているのである。

かりに神の肢体を「人体」として想像すれば、当然、胸の位置と、臍の位置では、その高さが違っている。また、その性質も違っている。

まず胸であるが、母親の胸からは、愛児が吸うための甘く芳醇な乳が湧出する。それゆえ胸は、優しさ、柔らかさを印象づける部位となる。

他方、骨で囲まれていない臍まわりには、その引きしまったウエストを保つため「筋トレを続ける強い意志」が不可欠となる。妥協と惰性は、ウエストを醜く、たるませるばかりだからだ。

よって臍まわりは、それを「教え」に焼き直すとしたら、どうしても厳しい印象を与えざるを得ない部位となろう。

つまり、一人の人間の同一肢体の中にあつたとしても、その該当部位によっては、印象や、求められるものがガラリと変わってくるのである。

母性と父性

これは単なる比喩ではない。

「神の救いに与るには、汝らは、子供のごとくあらねばならない」と説くイエスの教えは、霊的な母性愛そのものである。

対して、旧約のヤハウェ神が突きつける「戒め」を守るためには、きわめて父性的な「強い意志」が必要になる。

あくまでも一柱である神は、これらの「部位によって異なる教え」を説くために、イエスとモーセを必要とした。あるいは、新約の時代と、旧約の時代を必要としたのである。

だから私は、それを二柱の神のごとく、別々の名前で呼ぶことは、断じて否定せざるを得ない。それは単に、要りもしない混乱を引き起こすばかりだからだ――

以上が第一福音書からの引用であるが、右の「要りもしない混乱」を引き起こしたのが、グノーシス主義者たちだった。彼らは、イエスの神をプレパトルと呼び、他方ヤハウェ神をデミウルゴスと呼んだ。そして、イエスの神のみを真なる神として崇め、ヤハウェのほうは邪神として貶めたのだった。

こうした二神主義を、私は「グノーシス主義の思想的疵」であるとした。この疵のゆえに、グノーシス主義は錬金術に劣るというのが、私の主張の一つである。錬金術の神は、終始一つであるからだ。

（2）座標5を強要された民族

ヤハウェが求めたもの

胸の高さ（座標9）については、次の章で叙述することになるので、ここでは臍の高さ（座標5）のほうを優先して語ることにしよう。

そうしてみると、ヤハウェがユダヤ民族に求めたのは、ひとえに「律法の遵守による精神の鍛練」だった。その鍛練によって、座標5の「自我の確立」に至ることが、ユダヤ民族に与えられた主要課題なのである。

そして、それが鍛練であるからには、どうしても厳しいものとならざるを得ない。むしろ、これを課せられた方にとって、その厳しさは、大きな心的重圧とならざるを得ない。

とはいえ、座標5に至るためには、このような精神的負荷、あるいは緊張感はむしろ不可欠なのである。なぜなら負荷を与えられてこそ、それを乗り越えようとして、筋肉も精神も成長するのだからだ。

もっとも、私など常人よりも弛緩を求めずにはいられない質であるから、とてもユダヤ人共同体の一員にはなれそうもない。

というより、もし出エジプトの時代に生まれていたら、私など、神罰（死刑）を喰らって、早々に共同体から、姿を消してしまっていただろう。

それも当然で、いま旧約聖書を読んでも、私には、ユダヤ人たちを憐れむことは出来ても、そこに加わりたいなどという気持ちには、全くなれないのである。

許されなかった弛緩

しかしユダヤ人たちは、彼らの境遇を通して——つまり聖書を通して——座標5に至るためのプロセスを、全人類に教えない訳にはいかなかった。それが彼らの使命であり宿命であったからだ。かつてヤハウエは、アブラハムに言った。

「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る」

これは実質的には「聖書に刻まれたユダヤ人の姿によって、あらゆる国の民が、座標5の在り方を学ぶことになる」ということなのである。

それだからユダヤ民族の歴史は、

「神から鍛練と緊張を求められながらも、それに耐えられず『弛緩』を希求せずにはいられなくなる。そして、これをヤハウエに咎められる」

というパターンを繰り返すことになる。そうして咎められたユダヤ人たちは、再び鍛練と緊張を、自分たちの生活に課していく、と。

その際、とくにヤハウエがユダヤ人たちに求めたのは、いわゆる「十戒」の第一、二、七条を守ることだった。具体的には、次の三つということになる。

- 1 あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。
- 2 あなたはいかなる像もつくってはならない。
- 7 姦淫してはならない。

しかしユダヤ人は、往々にしてこの戒めを破った。バール神やアシュタロテといった神の像を祀り、性的オルギアをとまなう祭儀を行ったのである。

それは自我の崩壊による、まさに弛緩の宗教儀式であった。読者はこのような宗教儀式を「ディオニュソスの祭」として、すでによく知っているはずである。

神罰と緊張の回復

ユダヤ民族がバール神を求め、その母アシュタロテを求めたのは、まさに彼らにとっての「弛緩への希求」そのものだった。そして本性論を語ってしまえば、人間というものは、そのような弛緩を求めずにはいられない生き物である。

しかしヤハウエ神は、その「仕方がないこと」を決して許さなかった。

ヤハウェの遣いである、士師や預言者によって、そうした弛緩の宗教は、無慈悲に、徹底的に否定された。ときには、これに加わったユダヤ人もろとも「弛緩の宗教」が殲滅されたほどである。

その中でも、最も劇的なのが、預言者エリヤによる、バール神官六百人の大殺戮であろう。これは火の玉の落下による殲滅だった。恐ろしすぎて、これではオチオチ気を緩ませてもらえない。

こうしてユダヤ人たちは、深い悔悟のもとに、再びヤハウェの膝元へと戻っていく。そうして再び「律法の遵守」という、鍛錬と緊張の日々を甘受することになるのである。

しかしながら、このパターンは、本当に幾度となく繰り返されるのであって、それこそ「旧約聖書を終始一貫している」と言ってもいいほどである。

そうして、この繰り返し最果てに行き着いたのが「パリサイ派としてのユダヤ人」の姿であった。彼らは、まさしく常に鍛錬と緊張を絶やさなかった人々だった。

とはいえ、彼らには病的なまでの偏狭性が見られ、この偏狭性がイエス・キリストを十字架にけることにもなる。それを考えると、聖書とは、まことに味の苦い書物であると言わざるを得ない。

（3）鍛錬を継いだ者たち

ユダヤ教とプロテスタント

キリスト教の時代になって、ユダヤ民族の鍛錬を引き継いだのが、プロテスタントであると言える。次の文章などは、まさしくその証左となるだろう。

——プロテスタントは、ローマ・カトリック教会の「伝統」（マリア崇拜を含めて）に戦いを挑むにあたり、「旧約聖書に還れ」と叫んだ。

——こうして「旧約聖書へ還れ」という運動が、ルターを含めてドイツ宗教改革派を覆ったといつてよいだろう。

上山安敏『魔女とキリスト教』より

そうであるため、プロテスタントは、きわめて自律性と道徳性を尊重する。それは精神鍛錬そのものであり、また精神鍛錬の成果でもあった。

なにしろ、プロテスタントにおいては、全ての信徒が、祭祀（キリスト教を主催する者）であると考えるのである。何の会であれ、主催者には、大きな責任が伴うことになるだろう。

その点「教皇が右を向けば、自分も右を向くべき」と教え込まれるカトリックの信徒とは比べるべくもない。プロテスタントの自律的緊張度は、それより遙かに高次の領域まで達していることだろう。

そして、聖書原理主義でもある彼らは、モーセの律法（旧約聖書）にも、やはり強い影響を受けざるを得ない。それが彼らを、カトリック教徒以上に、厳格な道徳家にするのである。

その後、プロテスタントの歴史としては、この自律性と道徳性が、さらにカルヴァンの「現世内禁欲」という枠組みを付与されることになる。

すると、経済的成功こそが、彼らにとっての「自分が神に愛されている証拠」となった。それこそが、現世のなかで行った宗教的態度（＝禁欲的勤労）の成果と見なされたからだ。

かくして、プロテスタントの自律性と道徳性は、経済的な努力へと転換され、最終的には、それが多くの「社会的成功」として結実することになる。

アメリカという国

前項のような精神を育んだプロテスタントが、自分たちの理想を、新大陸で実現しようとした。それがアメリカの建国期の姿である。

——ピューリタンと呼ばれたまさに新プロテスタンティズムの精神を具現化した人々四一名を含む一〇二名がその船には乗り込んでいた。六六日をかけて船は大西洋を渡った。

彼らは十一月二一日、船上で新しい約束の地での生活について協議を行い、いわゆる「メイフラワー誓約」を作成した。

そこには公平と平等とが重んじられること、法に基づいて理想社会を建設する精神が重視されること、人々はイングランドでの身分ではなく、同じ目的を持った個人として、互いに尊重され、共同体を形成すべきことが記されており、それは神の名のもとでなされる社会契約という形をとっていた。

深井智朗『プロテスタンティズム』より

このような精神で建国されたアメリカには、現代においても、やはり一種独特の宗教的な雰囲気漂っている。それはカトリック的なものとは明らかに異なったものであり、自主性、道徳性、経済発展といったもので出来ていると思われる。

そして、それらは継続する意志的努力、つまり「精神のたゆまぬ鍛練」があつてこそ成立する。そのため私は、そのような鍛練の背後に、かのヤハウェ神の影響を見る思いがするのである。

これで座標5の補記を了とすることにしよう。

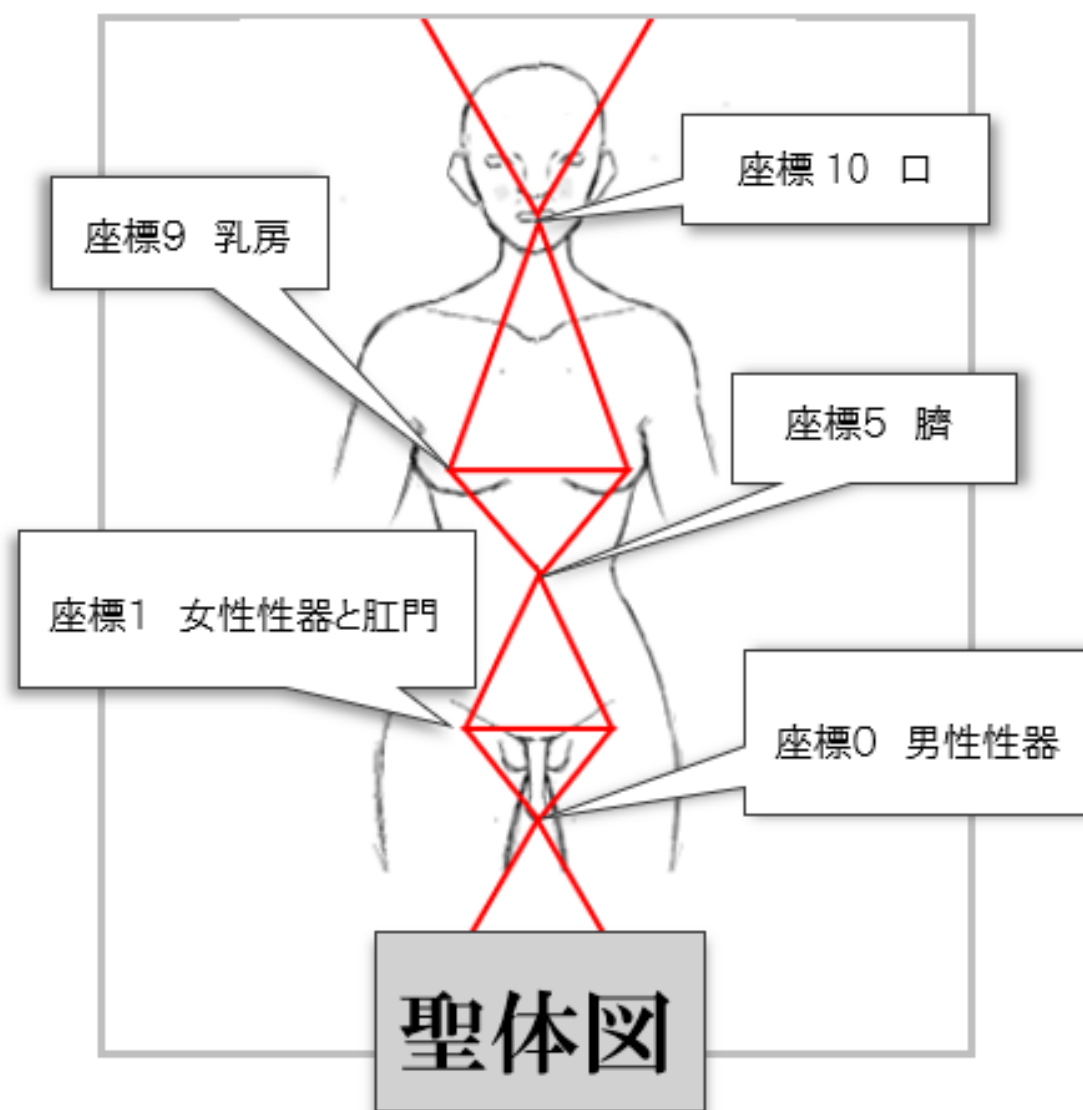
第5章 乳房（座標9）

（1）聖母の座

乳首と乳房

臍は、ヘルメスの杖を形づくる、二本の線分の交差点となっている。そして、その交差点（臍）から上方に向かっていく二本線は、乳首の高さにいたって、最も離れた二地点となる。本章では、この高度が論じられることになる。

聖体図完成.png



それゆえ本章のタイトルも「乳首」とするべきかと思ったが、すぐにこれを思い直した。それというのも、かかる乳首は、女性だけでなく、男性にも一応は備わっているからである。

さしあたって乳房が、古来より「女性を象徴する部位」とされてきたことは、紛れもない事実である。他方、男性にも胸部があり、そこには小ぶりの乳首がついている。だが、それを理由にして、この部位が「男性を象徴する部位である」とは誰も口にしない。

もしも胸部が男性性のシンボルになるとしたら、それは皮膚の下で発達した、大胸筋の見事さが讃えられた場合のみであろう。しかも、それはごく少数の男性にしか当てはまらない。よって、女性の乳房が持っている普遍性と比べたら、ほとんど稀少種の範囲に留まってしまふ。

ひるがえって私は、本章において「女性性の象徴としての胸」をこそ、ここで描出しようと思っているのだ。

それゆえ章タイトルでも、男女共通に見られる「乳首」という語は使わず、もっぱら女性にのみ見られる「乳房」という語を使うことにした。

ちなみに私は、乳房をして「もっぱら女性のみに見られる」とし、純粋に「女性のみに見られる」とはしなかった。それというのは、相撲の中継を見ていたときに「力士の胸もまた、乳房のくくりに入るかな」と思ってしまったからである。

とはいえそれは、本章との絡みからすれば、全くもってどうでもいいことだ。本筋とは関係がないので、読者はべつに気になさなくて結構である。

座標9 アルベド

さて、この胸の高さ（座標9）は、ヘルメスの杖においては「アルベド」を意味している。そして、このアルベドというラテン語を、日本語に翻訳すると「白化」あるいは「白」となる。

第三福音書で語ったように、このアルベドは、そこに至った主体に「無限、永遠、救済」を感得させる境地だ。そして、これらの要素を人格的に象徴させると「聖母」となる。つまり、この聖母が主体に、普遍的な救済を与えてくる、と人々は考えるわけだ。

そして、ギリシア神話ならばアルテミス、仏教ならば阿弥陀如来、神道ならば天照大御神あたりが「聖母」の役割を担っている。もっとも、阿弥陀如来は男性ということになっているが、その性質は、実に女性的であると言えるだろう。

しかしながら、聖母として最もグローバルに認知されているのは、間違いなく「聖母マリア」であろう。なにせキリスト教は、世界でいちばん信者数が多い宗教である。しかも、そのキリスト教のなかのカトリックなどは、一時期あやうく「マリア教」になりかけたほどなのだから。

肉体的汚れを離れた母性

この聖母マリア最大の特徴は、彼女が処女でありながら子供を産んだということである。その子供というの、かのイエス・キリストであることは言うまでもない。

すでに何度か表明していることであるが、私はこれが歴史的事実であるとは思っていない。それどころか、究極的には、この迷信は、キリスト教の害となったとさえ考えている。第五、第六福音書で語った、無原罪の弊害である。

さりながら、マリアの処女出産が、古くから大勢の人々の支持を得ている教義であることには、一切の疑いを挟む余地がない。

これは多くの人々が、その深層心理のうちに「アルベド」という悟りを求めていること。そして、それと同時に、アルベドの悟りを象徴する「聖母的な奇跡（処女懐胎）」をも、暗に求めていることを意味しているのだろう。

とは言っても、一神教であるキリスト教世界では、聖母マリアは、信仰の対象までは高められていない。クリスチャンが信仰しているのは、三位一体の神のみであるからだ。すなわち、父なる神、子なるキリスト、そして聖霊という「三つの位相の総合体」だけが、彼らの信仰対象なのである。

それゆえマリアに対しては、信仰という言葉ではなく「崇敬」という言葉が使われる。これは要するに、信仰が少しだけトーンダウンしたものだと考えられるだろう。

しかしながら、この二千年の間ずっと、聖母マリアが信者たちから「聖なる存在」として仰ぎ見られていることに違いはない。

そうであるため、マリアの肉体的な出産シーンなどは、クリスチャンたるもの、あまり具体的に想像してよいものにはなっていない。というよりは「ほとんど想像もつかない」と言ったほうが正確だろうが。畢竟、クリスチャンにとってのマリアとは、幼児イエスを抱いた若い女性ではあっても、出産シーンのさなかにあって、息もつけずに苦しんでいる母親などではないのである。

（2）汚れと縁ぶかい出産

分娩室の汚さ

だが実際の出産シーンは汚いものだ。

ユダヤ教の正統派などは「われわれは汚物と尿に交わって生まれた」とまで言っているらしい（上山安敏訳）。もっとも私は「われわれは汚物と尿に混じって生まれた」が正しい表現だと思っているが、そんなことは些細な違いだろう。

そして、右の言葉どおり、子供は糞尿とともに生まれてくる。なにしろ、女性の膣から生まれてくるのだから当たり前だ。尿道も肛門もすぐ近くにあるし、羊水や血、胎盤だって胎児と一緒に、膣から溢

れ出てくる。

その使用済みの胎盤は悪露（おろ）とも呼ばれるが、産婦人科の医師は、この悪露が体内に残らないよう、妊婦の子宮の中から掻き出すことさえする。

そのような状況だから、当然のように新生児は、血と汚物にまみれている。生まれた瞬間からキレイな赤ん坊など、まずいないだろう。あえて言えば、分娩室の情景は、汚さを感じさせるもので一杯なのである。

分娩室の実際

右で手厳しいこと（分娩の場面が汚いということ）を言ったので、フォローをかねて、少しばかり思いうちはなしをしたい。

私が初めて妻の出産に付き添ったときのことだ。その日の昼間、医師から「お腹の赤ちゃんの心音が弱まっている」という診断を受けた。

そのため医師は、人工的に破水を起こし、早急な出産を促した。結果すぐに妻の陣痛が始まったが、初産ゆえ、さすがにスムーズな出産とはならなかった。

このとき、のちに医師がカルテに「出血多量」と書くほどの血が流れた。要するに、お世辞にも、平穏な状態で済まされた分娩ではなかった。

そうしたなか、私に出来たのは、妻の腰をさすってやることぐらいだった。それは、陣痛の波が来るたびに妻が「腰をさすって」と求めてきたのに応えたものである。そうすると腰の痛みが若干和らぐらしい。

この行為自体はまったく大したものではないが、それでも後に妻は「傍にいてくれて良かった」と言ってくれた。

出産後の食事

かくして、妻が泣きながら生んだ子供は、その生まれた瞬間から、私には愛らしいものとして見えた。妻も「ぜんぜん猿じゃない。人間の顔してる」と驚いていた。

それが夜の十時ごろだったろうか。通常の病室に夕飯が置かれていたが、妻は「とても食べられない」とのこと。そこで妻以上に「出産の情景」を目に焼き付けていた私が、それを譲り受けることになった。補足しておく、妊婦本人には、自分の下半身を眺めることが出来ない。布で隠されているし、そもそも周囲を眺められるような精神的余裕がない。したがって間違いなく、妻より私のほうが「すごいもの」を見ていたはずである。

しかし私は、平然とした面持ちで、遅い夕飯を摂った。やたらとコアグラ（血や組織のかたまり）に似ているトマトだけは残したが、それ以外のものは完食してしまった。

よく「出産に付き合うと、夫はショックを受けて、妻を女性として見られなくなる」と言われる。しかし私の場合は、一切そんなことはなかった。血であろうが汚物であろうが屁でもなかった。分娩室を離れてすぐに食事を摂れたのがその証であるし、その後も、つづく二人の子供の出産に付き添ったのだ。よってこの言葉は、無責任なものではありえない。

（3）汚れを知らない母性

キレイな母乳という液体

話を戻すでしょう。右に見たような座標1の母性、つまり女性性器が関わる出産に対して、座標9の母性、アルベドの母性は「汚さ」を想起させることがない。

なにしろ出産にしても、それは「形而上的なイベント」「霊的なイベント」にしかならないのだから。つまり彼女の出産は、セックスを伴わない妊娠、出産シーンを想像させない分娩なのだから。

これを物質的な象徴として表すのが、女性の胸から分泌される「母乳」である。

この母乳を汚いものだと感じる人は、滅多にいないだろう。肉体から出る液体としては、尿や経血、汗や羊水などとも同通性を持っているが、母乳には、それらとは縁遠いほどの清潔感がある。

もちろん母乳も「人から分泌される液体」である時点で、腐敗や細菌等とも無縁ではない。だが、たとえばこれを尿と比較すれば、その清潔感の違いは「月とスッポン」のようなものだと言える。

そして、そのように清潔な液体が、母性と結びつくのである。

ゆえに、そこに込められることになるニュアンスは、ただただ美しい「母のやさしさ」「ぬくもり」「安息」「甘美さ」「柔らかさ」「愛のしずく」といったものとなる。マイナスの印象など、入る余地もない。それに、きつと母乳の色が白い（＝アルベド）ことが、その清潔感をいや増してもいるのだろう。白いワイシャツが清潔感を印象づけるように、白い母乳もまた、自然と清潔感を印象づけるのである。

これで母乳が黄色や赤色だったとしたら、我々が受ける印象も、どこか違う嫌なものになったかもしれない。たしかに初乳（初めて出る母乳）は黄色がかったているが、それすらも「白い母乳」の既知感のものでは、なかば黄金色に輝いて見えるのではなからうか。

母乳とエリクシル

ところで、錬金術の神的アイテムに、不老長寿を賦与する「エリクシル」という名の万能薬がある。現実にもそのような薬品が存在したのかは不明であるが、言い伝えによると、この万能薬は「白い液体」な

のだそうだ。

そして、不老長寿という考えの根源にあるのは「永遠への憧れ」である。直観的に（＝霊的に）永遠を認識できない人々は、不老長寿という形で「永遠」を感覚的なものとして曲解するのである。まあ、この曲解は、ほとんど錯覚と呼ばざるを得ないレベルのものではあるが。

いずれにしても、かの永遠を司るものこそは「アルベドの真理」である。

そして、このアルベドの「人体的な象徴」が乳房であるならばだ。現世においてエリクシルに最も近い液体は、他ならぬ「母乳」ということにならないだろうか。何となれば母乳は、エリクシルと同様の「白い液体」であるのだから。

また、これは第三福音書でも紹介したエピソードであるが、ギリシア神話には「女神ヘラの母乳が、天の川になった」という逸話がある。それは文字どおりの「天上的な母乳」であり、聖母的、エリクシル的な母乳であると言えるだろう。

実際、あの悠久の銀河（天の川）を眺めて、そこに永遠を思わない者があるだろうか。天の川を構成する星々の寿命は、人間のはかない寿命と比べれば、不老長寿どころか、ほとんど不老不死に近いものがあるだろう。

では、これで座標9の主文を了としよう。

ネチェリケト-聖なる身体 I

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
